

世界で一番若い国 南スーダン 入門

在南スーダン日本国大使館 | 2023年4月

南スーダンにゆかりのある**32人の日本人**が見た南スーダン
南スーダンとはどんな国で
遠い地で日本人は何をしているのか
在南スーダン日本国大使館のFacebook投稿を一冊の書籍にまとめた

目次

ごあいさつ ----- 在南スーダン日本国大使館 堤尚広

イントロダクション

06 南スーダン共和国の成り立ち

09 南スーダンの平和と国づくりへの道

11 日本と南スーダン

15 将来の日本・南スーダン関係への期待

----- 在南スーダン日本国大使館 堤尚広

本文

元在南スーダン日本国大使

17 南スーダンでの2年半 ----- 赤松武

21 南スーダンの平和構築 ----- 紀谷昌彦

JICA

24 「国民結束の日」開催の経緯

26 なぜ「国民結束の日」は必要か

29 「国民結束の日」は成功したのか

31 「国民結束の日」ジュバでの効果

----- 元JICA南スーダン事務所長 古川光明

33 「国民結束の日」開催支援 ----- 吉田祐樹

35 スポーツ振興と平和促進 ----- 吉田祐樹

37 農業支援 ----- 平田民子

40 農業技術協力CAMP ----- 平田民子

42	ナイル架橋建設プロジェクト	-----山根誠
44	きれいな水供給プロジェクト	
	-----株式会社TECインターナショナル	山田紹子
47	地方行政能力強化	-----松野素子
49	税関能力強化プロジェクト	-----沼口三典
51	ジェンダーに基づく暴力(GBV)	-----池内千草
53	廃棄物管理支援	-----千葉真理子
55	選挙支援	-----吉田祐樹
57	南スーダン支援への思い	-----山中祥史

国連PKO

59	日本のPKO活動	-----UNMISS 有園光代
62	情報処置の仕事	-----UNMISS 原田寿幸
63	輸送の仕事	-----UNMISS 森克仁
65	南スーダン発展の努力	-----UNMISS 田原快
66	連絡調整員の仕事	-----PKO事務局 須田大作

前橋市

68	オール前橋で事業に取り組む	
70	私が見た南スーダン	
71	市内の学生との交流	
73	東京五輪出場とその意味	
	-----	前橋市役所 内田健一

NGO

75	給水衛生支援	
77	コロナ感染予防支援	
79	「南部スーダン」時代の活動	
	-----	PWJ 山元めぐみ

民間企業

82	南スーダンの蜂蜜	-----5 タラント 水野行生
----	----------	------------------

国際機関

- 84 和平プロセスへの女性参加促進 -----UNMISS 西谷佳純
87 女性の収入向上支援 -----UNWomen 会田有紀
88 国内避難民(IDP)と水衛生支援 -----IOM 真嶋五月
90 IOMと輸送の仕事 -----IOM 笹川真
92 ICRCでの仕事 -----ICRC 前村明佳子
93 医師としての仕事 -----ICRC 大塚尚実

おまけ (大使館員より)

- 95 国旗 -----堤尚広
96 南スーダンまでの飛行機 -----大使館 広文班
98 Jebel Kujur山 -----青野龍朗
99 地元市場とレストラン -----永渕麻秀
101 邦人安全 -----斉藤雅博
102 自然と生活 -----徳盛亮介
104 部族 -----大使館 広文班
105 蜂蜜 -----堤尚広
106 シアバター -----堤尚広
107 石鹸 -----堤尚広
108 アート -----堤尚広

あとがき -----在南スーダン日本国大使館 中島真紀



ごあいさつ

在南スーダン日本大使館Facebookの読者の皆さん、南スーダンに関心をお持ちの皆さん、こんにちは。大使の堤の尚広です。2022年1月から2023年2月まで、当大使館のFacebookページにおいて、【南スーダン紹介シリーズ：ゆかりのある皆さまからの投稿】と題して、毎週金曜日、在南スーダン日本大使館Facebookで連載投稿を実施しました。積み重ねると47回となりました。南スーダンとの直接の関わりを持った方々の投稿なので、いずれも素晴らしい内容です。読み返すと、実は、大変読みやすい「南スーダン入門」となっていることに気づきました。そこで、これらの投稿と、他の関連情報を合わせて一つにまとめて、「南スーダン入門」として出版することとしました。今回の出版の目的は以下の三つです。

- (1) 南スーダンに関心を持つ日本の方を増やすこと。
- (2) 最新の南スーダン基礎情報を発信すること。
- (3) 南スーダン事情を深く学ぶための情報の入り口を提供すること。

また、この誰もがいつでもアクセスでき、南スーダン入門にとどまらず、さらに深く知り、調べることができるよう、最新の情報の入り口としての機能をもたせます。今後新しい情報が入った際には、更新していきたいと思います。

南スーダンに関心を持たれた方は、ぜひ、この「南スーダン入門」を読んでみてください。また、更に関連情報を知りたい方は、JICAや国際機関などへのリンク、その他情報ソースをご活用ください。そして、ご感想やコメントをお寄せください。更に良質の「南スーダン入門」を、是非ご一緒に作って参りましょう。

2023年4月15日、日本の自宅において。
在南スーダン日本国特命全権大使 堤尚広

南スーダン共和国の成り立ち

まずは、南スーダンの歴史から始めたいと思います。人類発祥の場所はこの辺りの地域ですので、長い歴史があるに違いないのですが、実のところ分からないことだらけです。調べてみて分かったことをご紹介します。

1. 長く多彩な歴史：Nubia、古代エジプト、キリスト教、イスラム教、英国、黒人国家独立

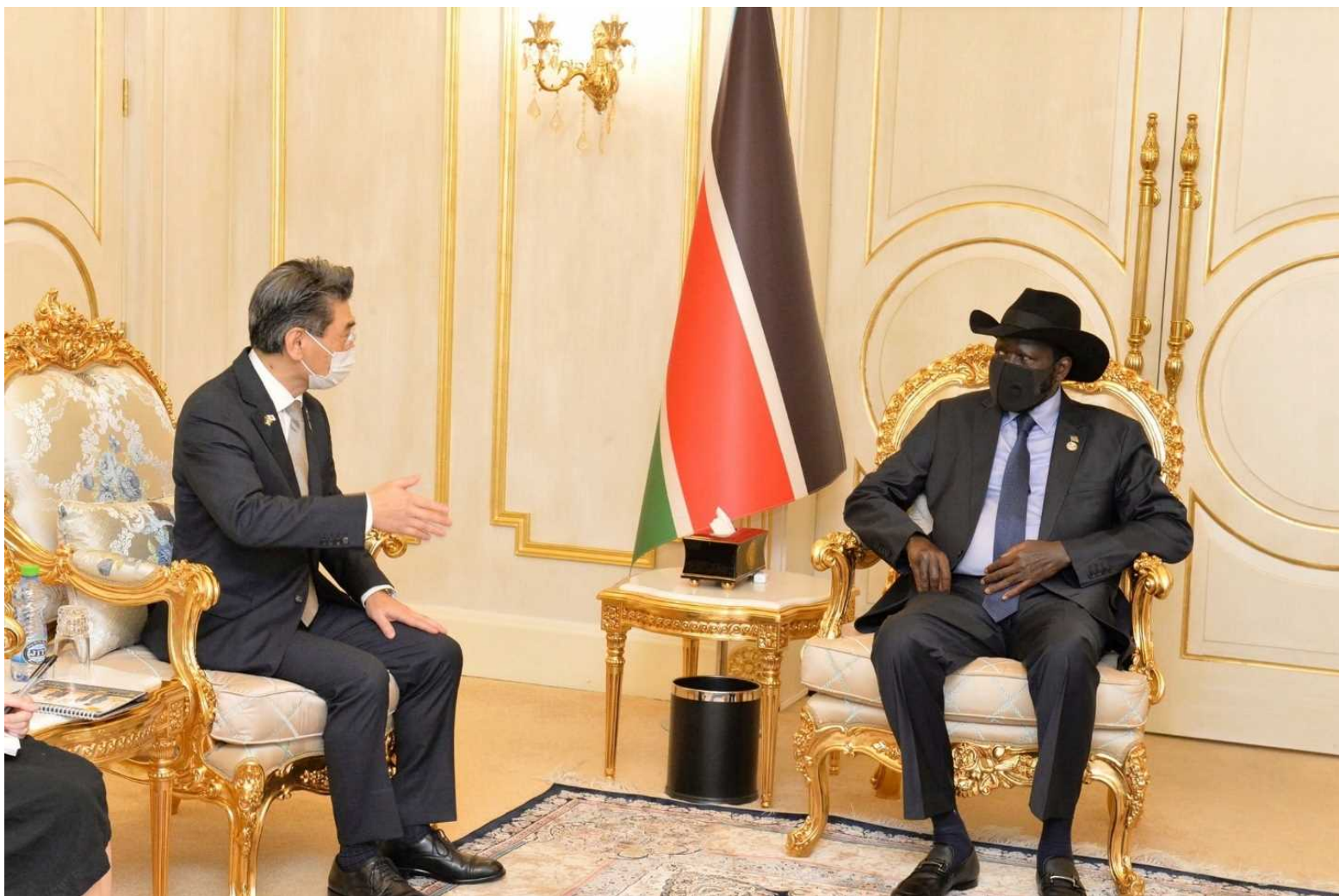
南スーダンは誕生して10歳の世界で一番若い国です。2011年7月9日、スーダン共和国から南部スーダンが分離独立し、南スーダン共和国が建国されました。南スーダンの独立建国が、2011年1月の住民投票により平和的に達成されたことは、記憶しておきたいことです。

南スーダンの住民の大多数はナイル・サハ

ラ語族の言語を話し、人種的には黒人です。ナイル・サハラ語族の一派と見做されるNubia人は、現在のエジプト南部から北スーダンの地域に、紀元前25世紀頃にはKushと呼ばれる高度な文明を築きました。

Kushは、古代エジプト王朝と交流し又戦い、紀元前11世紀にはKush王国を建て紀元4世紀まで勢力を誇ったとされます。スーダンには15世紀終わりまでキリスト教徒のNubia人の王国が存在しました。その間、徐々にイスラム教の浸透も起きています。

スーダンにおいて、アラブ、オスマントルコ、英国の進出が続き、1899年、支配者であった英国の政策で、スーダンは南北両地域を合わせて英国・エジプト共同統治の元に置かれました。





<2021年6月23日 Maale(Nuer族)の踊り>

2. スーダン：英国、南北対立、南部の独立
英国・エジプト共同統治下のスーダンでは、北部には、アラブ系（人種的にはアラビア半島出身者、黒人、両者のミックス等様々）でイスラム教徒、南部には黒人でキリスト教または土着信仰の人々が暮らすという構図が出来ており、南北は分断統治の下に置かれました。

1956年には、南北地域を含むスーダン共和国が成立した後、首都ハレツームを中心とする北部のアラブ系の主流派がこの国の実権を握ります。建国前の1955年から、これに不満を持つ南部からの自治の要求が内戦に発展し（第一次内戦）、1972年の和平合意まで続きます。

1983年、スーダンのニメイリ政権がイスラム主義による統治を始めたことから、黒人、キリスト教、伝統宗教主体の南部の反発を招き、内戦が再燃します（第二次内戦）。

同年、南部スーダンではジョン・ギャラン

（南部最大勢力のデインカ族出身）が率いる SPLM/A(Sudan People's Liberation Movement/Army)が成立し、闘争を主導します。2005年にナイロビで南北包括合意が成立して内戦は終了します。

その後、2011年に南部は住民投票により南スーダン共和国として独立します。南スーダンのリーダーは、SPLM/Aを率いるキール大統領とSPLM/A-IO(South Sudan Liberation Movement/Army In Opposition)を率いるマチャール第一副大統領の2人です。

3. 建国後の苦難：内戦、暫定統一政府成立
南スーダン共和国は、世界から祝福され、支援されて歩み始めました。石油・鉱物資源、肥沃な土地、豊富な水があり、発展のポテンシャルに満ちています。しかし、平和が定着し経済開発が進む前に、すぐに困難に直面します。スーダンの下での内戦を経てようやく独立した途端、今度は自らの国での内戦に突入したのです。

2013年12月、ライバル関係にあったキール大統領とマチャール第一副大統領の部隊の衝突から、全国的な内戦に発展します。

2015年8月に両者の停戦が成立しますが、2016年7月に再び双方部隊が衝突します。そこでは、南スーダンの最大民族ディンカ族がキール大統領の支持基盤、第二の民族ヌエル族がマチャール第一副大統領の支持基盤という関係もあり、この内戦は二人の権力争いであるとともに、ディンカ族対ヌエル族という民族対立でもあります。

この内戦は2017年12月の停戦合意、2018年9月のR-ARCSS(Revitalized Agreement on the Resolution of the Conflict in South Sudan)という和平合意署名により終結し、2020年2月にキール大統領、マチャール第一副大統領、及び各軍事勢力による暫定統一政府が成立しました。

現在、暫定政府が、R-ARCSSに規定された、停戦継続、統一軍編成、憲法制定、行政、司法の整備、民主的選挙、国民和解などに取り組んでいます。今度こそ、平和を定着させ、人々がよりよい生活のために集中できるような国を作ってほしいと期待します。

4. 長い内戦は膨大な難民、避難民を生んだ
繰り返される内戦の結果、多くの人命が失われ、財産も毀損されました。更には、膨大な難民、避難民を産みました。現在、南スー

ダンから国外に逃げた難民が230万人、南スーダン国内で逃げた170万人の国内避難民がいます。南スーダンの人口は1,400万人です。

<参考資料>

・外務省 | 南スーダン共和国基礎データ

(https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/s_sudan/data.html#section1)

・Britannica | Sudan

(<https://www.britannica.com/place/Sudan>)

・Britannica | South Sudan

(<https://www.britannica.com/place/South-Sudan>)

・UNOCHA | About OCHA South Sudan

(<https://www.unocha.org/south-sudan/about-ocha>)

(2022年1月7日 投稿)



<2020年8月21日 カミサ・ワ二外務国際協力大臣表敬>



<2020年10月3日 ジュバで開催されたスーダン（北）和平合意署名式>

南スーダンの平和と国づくりへの道

今回は、南スーダンの平和の構築・定着、国づくりの現状と見通しについてご紹介します。

1. 平和と国づくりは始まったばかり

第1回で説明したとおり、南スーダンでは独立後まもなく、2013、2016年のキール大統領派とマチャール第一副大統領派の衝突から内戦が起きました。その後2017年12月に停戦合意、2018年9月のR-ARCSS（Revitalized Agreement on the Resolution of the Conflict in South Sudan）という和平合意署名により内戦が終結しました。そして、2020年2月にキール大統領、マチャール第一副大統領、及び各派勢力による暫定統一政府が成立しました。

R-ARCSSには、南スーダンが平和を維持定着させ、国家機能を整備し、発展して行くための仕組みづくりが規定されています。具体的には、停戦継続、統一軍編成、憲法制定、行政、立法、司法の整備、民主的選挙、国民和解といった事項についての、責任・権限の分担、手続き、スケジュールが記載されており、これを暫定政府が実行し、アフリカ連合（African Union、AU）や国際社会が見守り、支援することとなっています。日本は、R-ARCSSの当事国ではありませんが、その作成段階から、深く関与し、R-ARCSS実施の支援者となっています。

これまでのところ、各軍事勢力間の停戦は維持されています。また、中央政府、地方政府、国会、地方議会ほぼ整備されました。また、憲



<2022年1月3日 ジュバ市の風景>



<2020年9月4日 白ナイル川>

法制定プロセスも開始され、経済財政管理の改革も始まっています。今後は、統一軍編成、司法改革、憲法制定、そして民主的選挙という課題に取り組んでいく段階です。

2. 全ての鍵は統一軍の編成

その中で、鍵となるのが、統一軍（国軍、警察、治安機関、監獄等を包含する）の編成です。統一軍、警察その他の武力組織を、各派閥のためのものから、国家と国民のために働くものに変えることです。国と国民の安全を守る組織がなければ、治安、公正な選挙も司法手続きも不可能です。その意味で、国の活動の全ての前提条件です。実は、R-ARCSSのスケジュール上は、ずっと前に完成しているはずでしたが、まだ各軍事勢力の兵士の適性を見分けるスクリーニングが始まったばかりで、大幅に遅れています。

統一軍編成はR-ARCSSの実施の中で最も困難な挑戦です。何故なら、現在の暫定統一政府は、長く対立してきた軍事勢力の連合だからです。統一軍を編成するためには、指揮系統を整備する必要があり、指揮系統の整備はとりもなおさず、各軍事勢力の統一軍における権力配分についての合意、言い換えれば各勢力の妥協を求める作業だからです。

このため、統一軍の編成が無事に完成するか否かは予断を許さず、今まさに、R-ARCSS

の和平プロセスは正念場を迎えていると言えます。

3. インフラや社会サービスの全てが不足

南スーダンは、日本の約1.7倍の広さがありますが、殆ど開発されていません。南スーダンは、スーダン時代から続いた内戦によって、電力、道路などの経済インフラ、保健、教育など社会サービスが全て不足しています。それらのサービスを提供する地方の政府・行政は組織途上であり機能していません。肥沃な土地と水資源があり、農業の潜在力は高いと見られていますが、産業と呼べる農業生産は行われておらず、食料を輸入と国際的食糧支援に頼っています。昨年は洪水の被害が甚大で、国民福祉の全ての面で大きな打撃となりました。一言で言えば、国民生活を自国で賄うことは全くできておらず、国際社会からの支援に全面的に依存しています。

政府の収入は9割近くを石油に依存しています。貴金属、鉱物資源は豊富だとされますが、開発が進んでいません。今後、南スーダンが自律的に発展していくためには、道路、通信、エネルギー、金融、市場、貿易投資、医療・衛生、教育・人材育成といった、あらゆる面での開発が必要です。

南スーダンの経済指標（2021年、IMF）は、人口：1,400万人、GDP：32.6億米ドル、一

人当りGDP：230米ドル、経済成長見込み：5.3%、インフレ率：23%。識字率（2018年、UNESCO）：34.5%。230万人の南スーダン人難民が近隣国に、170万人の避難民が国内におり、830万人が人道支援を必要としています（2021年、UNOCHA）。面積：63.4万m²（2018、World Bank）。60以上の民族を抱えます。

まずは平和を定着させ、国民が安心して経済活動に専念できるようにすること、また、基本的な社会サービスを国民に提供すること、そして経済インフラ（ハード、ソフト双方）整備によって自立的発展の基盤を形成することが重要です。時間はかかります。長い目で見守りたいところです。

<参考資料>

- ・ Revitalised Agreement on the Resolution of the Conflict in the Republic of South Sudan (R-ARCSS)
- ・ 南スーダン大統領府Facebook
(<https://www.facebook.com/StateHouseJ1>)
- ・ 外務省 | 南スーダン共和国基礎データ
(https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/s_sudan/data.html#section1)
- ・ IMF | Republic of South Sudan
(<https://www.imf.org/en/Countries/SSD>)
- ・ UNOCHA | About OCHA South Sudan
(<https://www.unocha.org/south-sudan>)

（2022年1月14日投稿）



<2022年1月12日 白ナイル川>

日本と南スーダン

第2回では、南スーダンの独立後の国づくりへ取り組みと課題をご説明しました。今回は、日本が南スーダンとどのように関わってきたかをご紹介します。

1. 南スーダン共和国誕生からの10年間、日本はずっと南スーダンを応援している

日本は、南スーダンの独立当初から、その平和と国づくりへの努力を支援することに普遍的価値を見出し、積極的に支援してきています。ざっと見て、独立後今日までに、600億円超の資金、約二千人の人員を投入しています。以下、平和への支援、国づくりへの支援、代表的事例をご紹介します。

2. 平和への支援

南スーダンの平和構築に関し、国際社会からの最も重要な支援として、国連PKOのUNMISS (United Nations Mission in South Sudan) が派遣されています。そこに、日本のPKO本部から現役の若手自衛官4名が1年交代で派遣されています。また、その4名を支援するために、連絡調整要員（現在1名）が長期出張の形で、在南スーダン日本大使館で勤務しています。

また、2012年から2017年まで、UNMISSに延べ約4,000人の自衛隊の施設部隊が派遣され、道路や井戸などを建設しました。また、統一軍の編成支援のために、日本のPKO本部からテントや水タンクなどの物資提供をしました。

さらに、国際機関と連携し、地雷除去、新型コロナウイルス対策、食糧援助、小児感染症対策、武装・動員解除・社会復帰、職業訓練、女性支援、など、さまざまな形で、人道、復興、開発をサポートしてきています。その総額は約2億ドルです。

3. 国づくりへの支援

平和と人道支援によって国民が安心して生きていけることは大前提ですが、それだけでは国と国民が豊かになる保証はありません。国家としての持続的発展には、インフラ整備や人材育成が不可欠です。それに寄与するべく、日本はODAを活用して、継続的に支援しています。これまで、無償資金協力、技術協力併せて約420億円の支援実績があります。この資金を使って、ナイル架橋建設計画（通称フリーダム・ブリッジ）、ジュバ市水供給





<2021年9月17日 ジュバ市航空検疫施設引渡式>



<2021年9月27日 ハイソムUNMISS司令との面談>



<2020年9月3日 フリーダムブリッジ視察>



<2020年9月3日 ジュバ市水供給改善計画視察>

改善計画、ジュバ河川港拡充及び河川横断バース供与、上ナイル大学整備、国境・出入国管理強化、廃棄物処理強化などのプロジェクトが実施中ないし、実施済みです。

4. 日本のODA事業代表例：フリーダム・ブリッジ、ジュバ市水供給改善計画

以下、南スーダンにおいて最もよく知られている、つまり期待の大きな日本の支援事業を2件取り上げてご説明します。この二つの事業は、JICA（日本国際協力機構）の南スーダン事務所が事業実施を担当し、日本企業（大日本土木、建設技研インターナショナル、TECインターナショナル）が現場を動かすという体制で頑張っています。

第一は、南スーダンの国土を南から北に向かって流れる白ナイル川は、水、水産資源の供給源として重要である一方、交通インフラの観点からは、国土を東西に分断するものです。ナイル川に架かる唯一の橋は老朽化が激しく、円滑な物流のために、新しい橋が待ち望まれています。フリーダム・ブリッジはこのニーズに応えるもので、完成すればジュバ市からウガンダやケニアにつながる国際回廊の一部となります。現在のところ2022年7月に開通する見込みです。

第二は、ジュバ市水供給改善計画は、きれいな飲み水を首都であるジュバ市民に届ける事業です。ジュバ市では人口が急増しましたが、上水道施設は人口増加に対応できず、老朽化で漏水が多発しています。住民が頼る給水車の劣悪な水質による水因性疾病の発生も問題です。ジュバ市水供給改善計画では、浄水施設拡張、送配水管網・給水施設を新設します。完成すれば市内120か所の公共水栓から取水できるようになります。現時点では2023年2月の完成予定です。

<参考資料>

・ 外務省 | 南スーダン共和国基礎データ

(<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/sudan/data.html#section1>)

・ JICA南スーダン事務所Facebook

(<https://www.facebook.com/jicass0709>)

・ 紀谷昌彦駐南スーダン大使（当時）による『南スーダン通信』

(https://www.ss.emb-japan.go.jp/itp.../topics_newsletter.html)

（2022年1月21日投稿）

将来の日本・南スーダン関係への期待

今回は、今後の日本・南スーダン関係への期待と題して、私の考えを述べたいと思います。

1. 日本は何のために南スーダンを支援するのか？

根本的な問いから始めたいと思います。そもそも、日本は何故、この遠い南スーダンにやって来て、資源を投入して南スーダンを支援をするのでしょうか？

新しい独立国が内戦から立ち直り平和と豊かな国を目指している。これを支えるのは、それ自体十分に価値があることだと思います。しかし、私は、それに加えて日本の利益という観点をより明確にした整理が必要ではないかと考えました。この一年間、繰り返し、以下の5つの観点を南スーダンの大統領以下の要人に説明してきました。

(1) 積極的平和主義

南スーダンの和平への努力は世界の安全につながり、それは日本の安全保障につながる。だから、地球上のどんなに離れた場所であっても、日本は平和構築の努力がなされている場所に進んで出かけ、それを全力で応援する。これは我が国の対外政策の基本たる積極的平和主義に完全に合致する。

(2) 人間の安全保障

全ての人間が、安全、健康、尊厳ある生活を送る資格があり、また持てる能力を最大限発展させる場を与えられるべきだ。これが「人間の安全保障」の考え方。長年の内戦に苦しんできた南スーダンの人々に、人間の安全保障が確保されることを、日本は重視し、全力で応援する。



（３）東アフリカの安定

南スーダンの安定は東アフリカの安定に直結する。日本にとって東アフリカはアフリカ大陸へのゲートウェイであるので、日本はその安定性を極めて重視している。南スーダンと近隣国との間には、歴史的、経済的な相互交流があり、言語、文化、習慣を共有する人々が国境に跨って住んでいる。南スーダンの安定は近隣国の安定に貢献する。逆に南スーダンの不安定化は近隣諸国、ひいては東アフリカの不安定化要因となる。

（４）国際社会における南スーダンとの協力

日本は南スーダンが日本にとっての良き友人であってほしい。法の支配、保健、環境、国際選挙、安保理改革などの国際社会における課題への取り組みにおいて、南スーダンからの支持を得たい。

（５）二国間交流

現在は二国間のビジネス、草の根交流はわずか。文化的交流はほとんどない。将来、南スーダンの治安安定、インフラ整備等によって、二国間のビジネス、文化、草の根の交流が活発になることを大いに期待している。

この五点は、多くの南スーダン要人から賛同、

支持を得ました。そして、2021年7月、我が国の菅総理からニャンデン南スーダン副大統領に対して、日本の対南スーダン政策の基本的考え方としてご説明いただきました。

２．何を目指すか：「真の友」という評価を守りたい

（１）独立後の10年で積み上げてきた、日本の南スーダンの平和と国づくりへの自助努力支援は、目的としても内容としても良いものであり、その結果大事な部分で成果をあげていると言えます。その担い手は日本政府だけではありません。ずっと、立派な志と勇気と実行力を発揮して、南スーダンのために働く日本人がおられます。ODA事業を担うJICA関係者、これに参加している企業関係者、南スーダンで活躍する国際機関職員、宗教団体やNGOの一員として南スーダン人と共に汗を流す方々。日本からの応援もあります。前橋市は南スーダン陸上選手団を1年半に渡り受け入れ、2020東京オリンピック・パラリンピック出場をサポートしました。また、南スーダン産の蜂蜜をフェアトレードとして販売している方もおられます。これらの努力の積み重ねが、「日本」がこの地で最も高い評判という成果を生んでいます。



(2) 私はこれまでキール大統領と二度お会いして意見交換しました。その際、大統領は次のように言われました。「日本は南スーダンの真の友だ、いつも心からの支援を届けてくれる。心から感謝している。」そして、南スーダンの人々は、大統領と同じ日本に対する好印象を抱き、それを表現してくれます。更に、その好印象が、日本の政策や行動（例えば国際選挙）への支持という形で、具体化されています。私は、これこそが、日本がこれまでに積み上げてきた南スーダンとの付き合いにおいて得た、最大で最良の結果であると断言したいと思います。なお、2021年の大統領府作成カレンダーの6月は、日本大使の写真を掲載し、日本への好意を表現してくれました。

(3) 今後とも、「積極的平和主義」、「人間の安全保障」を高く掲げ、南スーダンの平和構築・定着を支援し、国づくりのニーズに合った開発協力を継続していきたいと思います。それにより、南スーダンの「真の友」であり続けたいと思います。また、「真の友」であり続けられれば、二国間の活発な経済、文化、草の根の交流は、自ずと続いてくると信じています。そして何よりも、南スーダンへの支援は、新しく誕生した国家の自立に向けた努力を支え、成功に貢献したという、誇るべき1ページを日本の歴史に刻むものであると考えます。

(4) 我が大使館は、南スーダンが長い歴史と伝統を持つ、豊かな土地であることを知ってい

ます。また、我々は、南スーダンの人々が伝統的な生活様式を守りながらも現代のグローバルな原理やルールにも適応しようと努力し、格闘していることを、間近で見えています。だからこそ、そのような人々の偉大で崇高な挑戦に対して、心からの敬意を払い、全力で応援して参ります。

<今後の連載への導入として>

読者の皆様、私は、南スーダンが自立できるようになるまで、日本が引き続き堅実な支援を実施するためには、大前提として、日本の皆様のご理解とご支持が必要だと考えます。そのようなご理解とご支持を得るためには、読者の皆様に、南スーダンがどんな国なのか、また、日本はここで何をしているのか、日本は南スーダンとどんな関係を築こうとしているのか、それが日本と南スーダンにとってどんな価値を持つのか、そういったことをご紹介したり、ご説明する必要があると考え、私はこの連載を始めました。今後この連載では、違う投稿者による違う角度からの南スーダン紹介が続きます。是非、引き続きご購入ください。また、よろしければ、ご家族、お友達、お知り合いに、是非この日本大使館Facebookをご紹介ください。下に、URLとQRコードを載せましたので、ご活用ください。次回以降も、お楽しみに。

<https://www.facebook.com/embassyofjapan.ss/>

(2022年1月28日投稿)



<南スーダン大統領府カレンダー。掲載写真は、2020年10月1日の信任状捧呈式。>



<2021年7月23日 南スーダンオリンピック・パラリンピック選手団>

南スーダンでの2年半

今週は、元在南スーダン日本国大使館特命全権大使、現在ストラスブール日本国総領事館
Consulat Général du Japon à
Strasbourg@Japonstrasbourg
の赤松 武総領事
@Takeshi Akamatsu

(<https://www.facebook.com/takeshi.akamatsu.1963>)

によるご投稿です。

是非、お楽しみください。

(2022年6月3日投稿)

5月19日、ジュバのフリーダム・ブリッジ
がついに完成し、大々的に引き渡し式が行わ
れました。ジュバからの報道を懐かしくなが
めつつ、合計2年半過ごした南スーダンでの
日々を思い出しました。

私が南スーダンに着任したのは2012年の8
月27日。まだ大使館も発足しておらず政府連
絡事務所の頃でしたが、すでに何年も前から

JICAの協力により様々な経済協力プロジェク
トが開始されていました。

中でもジュバ市給水計画、ジュバ港整備計画
とこのフリーダム・ブリッジ（ナイル川架橋
計画）は大型インフラ整備案件として南スー
ダン政府はもちろん、南スーダンの人々、さ
らには南スーダンの国造りに取り組んでいた
各国政府からも注目を集めたプロジェクトで
した。特に着工から7年強の月日を経て完成
したこの橋は、日本と南スーダンの関係を象
徴する大型プロジェクトです。

南スーダンが2011年に独立を果たす前から、
東京で南北スーダンを担当する課長として何
度もジュバに足を運びました。そのたびに開
発がすすむ南スーダンの様子を見るにつけ、
日本が手がける3つの大型インフラ整備プロ
ジェクトの進捗・完成は、それ以降も最初は
政府連絡事務所長として、さらには大使館発
足後の2013年11月からは初代大使としての活
動の中心に有りつづけました。



残念ながら2013年12月の大統領と副大統領間の対立から南スーダン全土が内戦・混乱状態に陥り、このナイル架橋を含むほぼすべての協力プロジェクトが一時停止を余儀なくされました。治安面から日本人技術者等の安全が確保出来ない以上仕方ない措置でしたが、その後も繰り返される南スーダンでの政治的混乱や、最近では新型コロナウイルスの蔓延により、その都度協力事業は中断、当初予定から竣工は大きく遅れることになりました。

ウガンダ国境からジュバに至る幹線道路をアメリカが、そして国内で唯一ジュバに架かる古いナイル橋に代わるフリーダム・ブリッジの建設を日本が請け負うことになった経緯は、当時JICAスーダン事務所長だった穴戸さんの「アフリカ紛争国スーダンの復興にかけー復興支援1500日の記録（佐伯印刷出版）」に詳しいので割愛しますが、ナイル架橋、ジュバ港の整備と計画中であったナイル川上流のマラカル港の整備によって、インド洋からナイル川を利用して南スーダン内陸部を結ぶ一大物流幹線を日本の協力で整備するという壮大な計画の重要な一コマが埋まったことは当時を知るものとしては大変感慨深いものがあります。

もちろんこれら日本の協力プロジェクトには、さまざまな形でUNMISS（国連南スーダン共和国ミッション）に派遣中だった自衛隊施設部隊

や日本のNGO、さらには多くの国際機関の邦人職員のみなさんからの陰に陽に支援がありました。

特に象徴的だったのは多くの大使館や政府機関が建ち並ぶジュバ市内中心のナ・バリ地区の道路を整備するプロジェクトです。JICAの技術支援、自衛隊施設隊と地元州政府による施工で整備が始まった道路は、不発弾が見つかるたびにUNMAS（国連地雷アクションサービス）に処理を依頼したり、完成後はJICAの廃棄物処理計画と連動して周辺住民を巻き込んだゴミ拾い事業とオール・ジャパンの枠組みを超えた取り組みとなりました。





また、当時ジュバで邦人職員が中心として日本政府と連携し高いプログラム実施実績を上げた経験から、国際機関側が日本政府との連携の重要性を認識し、その後東京事務所を開設に至ったと聞いた例もあります。「ナイルの水を飲んだものはナイルに帰る」ということわざがありますが、この国際機関（UNOPS、国連プロジェクトサービス機関）の東京事務所長は2代続けて当時ジュバで頑張っておられた邦人職員が務められています。

南スーダンで過ごした2年半は本当にいろいろなことがありました。2013年末の騒乱時には在留邦人のみなさまには国外退避をお願いしましたが、カナダなど欧米の一部大使館が待避する中、規模を縮小し安全環境の変化に細心の注意を払いつつもジュバに踏みとどまり続けました。翌14年になり、ようやく治安状況も落ち着きを見せたため、各種の協力案件も再開に向けた準備をはじめ、年末の天皇誕生日レセプションでODA協力事業の再開を発表しましたが、連日多くのメディアに取り上げられました。



ジュバを去りNYに異動した後、国連関係者や南スーダン政府高官から「日本は欧米各国と足並みを揃えて行動しているが、南スーダン政府からはそれ以上に信頼されるパートナーとして一目置かれている」と言われていることを直接・間接に聞き、密かにジュバでの取り組みは間違いではなかったとの思いを新たにすることを思い出します。

南スーダンを離任する直前、フリーダム・ブリッジの着工式が行われました。その際のスピーチ (<https://www.ss.emb-japan.go.jp/en/freedom%20bridge.pdf>)でも述べたとおり、今回完成したフリーダム・ブリッジが、独立以来混乱が断続的に続く南スーダンが安定し、日・南スーダン間の友好関係の進展の象徴となることを祈るとともに、現地で頑張っておられる関係者皆さんに改めて敬意を表して筆を擱きたいと思います。



南スーダンの平和構築

今週は、元在南スーダン日本国大使館特命全権大使、現在シドニー日本国総領事館Consul-General of Japan in Sydney, Australia (<https://www.facebook.com/CGJSYD/>)の紀谷 昌彦総領事によるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年6月10日投稿)

「南スーダンの平和」はどうすれば実現すると思いますか？私は、南スーダン人自身が自国の平和を心の中に思い描き、目に見える形に現実化して、国全体に広げていく決意を共有することが大事ではないかと思います。

南スーダン版の国民体育大会「国民結束の

日（National Unity Day）」は、JICAや自衛隊の支援を受けて、2016年1月に第1回大会を開催し、ジュバ衝突でJICAが退避した後の2017年1月にも第2回大会を自らの力で開催しました。開会式で、民族の異なる全国各地の代表が整然と入場行進する姿を見て、南スーダンの閣僚が「これこそ南スーダンが求めている平和だ」と言っていたことが深く心に残っています。フェアなスポーツでお互いに競い、勝者も敗者も相手をたたえ合う。国内の民族対立の克服が、まさに目に見える形になったものです。南スーダン人の心の中に、平和の基盤を築いた取組と感じました。



私は2015年4月から2017年9月まで、第2代の駐南スーダン日本国大使としてジュバに勤務しました。それ以前に国連や開発・平和構築について外務本省、防衛省や在外公館で担当した経験を生かし、南スーダン全国各地の前線に足を運んで、南スーダンの平和と自立の実現に尽力しました。そして、自衛隊、JICA、国際機関邦人職員、NGOや企業など様々な日本のアクターの活躍や相互の連携を後押しさせていただきました。

その中で浮かびあがってきたのは、分野を横断して共通した「オールジャパン」のアプローチです。それは、「自立・自助努力を重視する主要国である日本が関与することで、南スーダンの当事者の努力を後押しするとともに、国際社会との連携・協調を推進するための橋渡しの役割を担う」というものです。

日本は、19世紀から非欧米諸国の中でいち早く発展を遂げ、第二次大戦の惨禍を経て平和国家として世界に貢献してきました。南スーダンの平和と自立に日本の強みを生かして貢献することは、世界における日本への信頼と評価を高め、日本が平和と繁栄を実現するためにも重要です。





今も、南スーダンで日本がそのような役割を果たし、平和実現への歩みが着実に進んでいることを嬉しく思います。在南スーダン日本国大使館Facebookの読者の皆様におかれては、今後とも南スーダンでの「オールジャパン」の取組を温かく応援いただければ幸いです。
在シドニー日本国総領事 紀谷昌彦

（追伸）私の在勤時の南スーダンにご関心を持たれた方は、次の本をご参照ください。
紀谷昌彦『南スーダンに平和をつくる－「オールジャパン」の国際貢献』（ちくま新書）
（リンク）

在シドニー日本国総領事館Facebook

<https://www.facebook.com/CGJSYD>

紀谷昌彦Facebook

<https://www.facebook.com/masahiko.kiya>

「国民結束の日」開催の経緯

今週は、元JICA南スーダン事務所長で、現在静岡県立大学国際関係学部教授の古川 光明 (<https://m.facebook.com/profile.php?id=100015842526653>) さんによるご投稿の第1回目です。
是非、お楽しみください。

(2022年6月17日投稿)

独立後初の「国民結束の日」の経緯とその後

2022年3月、第6回「国民結束の日」が開催されましたが、その「国民結束の日」の開催経緯などをお伝えしたいと思います。

南スーダンは半世紀に及ぶ内戦を経て、2011年7月9日にスーダンから独立した最も新しい国です。

しかし、独立から約1年半後の2013年12月に紛争が勃発しました。その後、和平合意がなされ暫定政権が樹立したものの、予断を許さない状況が続きました。

独立後の開発援助は、これまでの伝統的な支援を日本も含めて展開してきました。その一方で、紛争で分断された社会において、民族融和と社会的結束は重要な課題となっていま

したが、南スーダンでは、どの国際協力ドナーも、社会的結束をテーマとする支援を真正面から取り上げて来ませんでした。

紛争後、国際社会と南スーダンが和平合意を進めるにあたっては、暫定政権の樹立、政府軍と反政府軍との統合、警察の統合など、上流部分での対応が議論されるものの、紛争被害者であるコミュニティや市民は周辺に追いやられるとともに、彼らは、紛争に辟易としていました。

そのような状況のなか、私はJICA南スーダン事務所長として、2014年11月にジュバに赴任しましたが、驚いたことに、紛争が繰り返される状況下においても若者は、至るところでサッカーをしていました。その現状を目の当たりにして、私は、スポーツが民族融和の一つのツールになるのではないかと考え、大使館、自衛隊、JICAからメンバーを集い、チームを立ち上げ、南スーダンチームと試合を何度も行いました。そこで感じたことは、サッカーは人種に関係なく人々を集め、ボール一つで結束することができるという実感でした。



そのような状況のなか、私はJICA南スーダン事務所長として、2014年11月にジュバに赴任しましたが、驚いたことに、紛争が繰り返される状況下においても若者は、至るところでサッカーをしていました。その現状を目の当たりにして、私は、スポーツが民族融和の一つのツールになるのではないかと考え、大使館、自衛隊、JICAからメンバーを集め、チームを立ち上げ、南スーダンチームと試合を何度も行いました。そこで感じたことは、サッカーは人種に関係なく人々を集め、ボール一つで結束することができるという実感でした。

そこで、南スーダン・スポーツ省エドワード局長を訪れ、スポーツを通じた支援の可能性について議論をしました。そのなかで、エドワード局長は、「今の南スーダンには州や民族を超えた繋がりが必要です。スーダン時代に平和な時期が10年ほどあった際、スポーツ大会をしたことがあります。それを復活させたい。」と熱心に話をしていました。その切実な思いを実現させようと、関係者に掛け合い、全国スポーツ大会開催を支援することになりました。

南スーダン政府はこの全国スポーツ大会を「National Unity Day（国民結束の日：NUD）」と命名し、現地にいた自衛隊や日本企業などの協力も得て、2016年1月に独立後初となる第1回大会を開催しました。しかし、同年、第2回目の紛争が7月に勃発しました。私が乗車する車も兵士に狙われ被弾し、最終的には93名の邦人やJICA関係者とともに、チャーター機で退避しました。

しかし、その翌月にはリオ・オリンピックが迫っていました。南スーダンは戦火のなかであり、予算もない、オリンピックには出場できないのではないかと考えられていましたが、前JICA北岡理事長は、「こんなときだからこそ、平和の祭典であるリオ・オリンピックに参加することが南スーダンの平和に向けた希望になるのではないか」との思いを示され、独立後、新たな国としては初めてとなるオリンピック参加支援を行ったのでした。

その後、「国民結束の日」は様々な苦難を乗り越えて毎年開催されるようになり、南スーダンにおける平和と結束の象徴となっています。また、東京オリンピックでは、前橋市が南スーダ

ンからの4名の選手と1名のコーチを同市で長期に受け入れ、2021年夏に開催された東京2020オリンピックで南スーダンの国旗を高々と上げ国の誇りと平和への願いとともに2名の陸上選手が参加したことは記憶に新しいと思います。彼らは、いずれも「国民結束の日」に参加した選手たちで、スポーツを通じた平和構築支援が国内の民族融和のみならず、国を超えての絆の構築に発展し、母国への希望の灯を与えたのでした。



なぜ「国民結束の日」は必要か

今週は、元JICA南スーダン事務所長で、現在静岡県立大学国際関係学部教授の古川 光明 (<https://m.facebook.com/profile.php?id=100015842526653>) さんによるご投稿の第2回目です。

是非、お楽しみください。

(2022年6月24日投稿)

「国民結束の日」の背景

今回は、南スーダンでなぜ、「国民結束の日」が必要だったのかについて、記載したいと思います。

南スーダンでなぜ、「国民結束の日」が必要だったのかを紐解くためには、伝統的な国内紛争要因についても知っておく必要があります。それは、家畜や土地を巡る民族間の紛争です。また、南スーダンにおける紛争の背

景を理解する上で、すべての農牧民のコミュニティにおいて動員の中心的な組織となるのが「年齢組」制度であり、そのなかでも若者が政治利用されてきた経緯があることも重要な事実です。

南スーダンは「暴力の文化」と称されることがあります。南スーダンでは、主要な民族としてキール大統領出身のディンカ族、マチャル第一副大統領出身のヌエル族やシルク族があげられますが、彼等は牧畜を中心とした半農・半牧の生計（以下、遊牧民）を営んでおり、彼らは、牛とともに生活をし、また、牛が貨幣に代わる貴重な財産であり、婚資でもあります。その貴重な財産を巡って昔から、他民族の牛を強奪する事案が繰り返行われてきたのです。



© Tariq Zaidi / ZUMA Press



南スーダンでは、領土、親族関係、首長、神話、牛、結婚によって決まる民族的構造が成り立っています。その民族的構造を支えるのが「年齢組」制度です。エヴァンズ＝プリチャード（1953）によりますと、例えば、ヌエル族の場合には、男子は全員、ガルと呼ばれる非常に過酷な手術を受けて少年から大人の仲間入りをします。具体的には、彼らの額の上に、小さなナイフで、骨に達するほどの深さの筋状の切傷を6本左右の耳の所まで入れられます。14歳-16歳に成人式を受けます。成人式を得た少年たちは、全員が一つの年齢組に所属します。一つの年齢組が切られるまでの年数は一様ではありませんが10年区切りとされています。

Pendle（2014）は、若者たちは大きな持参金が必要とされる結婚を求められ、現代においても牛がいかに中心的存在であり続けるかを示しています。家族の家畜だけが結婚を可能にし、伝統的な婚姻順序で若者を保ち、牛の配給を決め、持参金を交渉する男性の長老たちにその権限が従属されています。また、牛は婚資としての持参金(dowry payment)として利用される他、犯罪の損害に対する補償、また、儀礼の供養物としても必要とされ、社会政治関係の基礎となっています。具体的には、女性は、牛を最も多く提供する男性を選んで結婚します。そして、牛が家族や親族の大切な財産や富になり、社会的地位に影響するのです。そのため、多くの牛を所有するものは一夫多妻制である文化のなかで、多くの女性と結婚し、家族が増えることにより、また、社会的権力を有することになるのです。したがって、結婚前の青年にとって、牛は死活問題です。家父長制をとる遊牧民にとっては、若者が自由に扱える牛は限られており、他から

強奪するしかありません。牛の数が少なくなった場合にも同様です。そのため、牛を強奪することは彼らにとっては正当性を与える要因になるのです。昔から行われてきた牛強奪は、時代とともにその在り方に変化が生じました。

銃が普及する以前は、斧などの原始的な武器が用いられてきました。そのため、牛の強奪による死傷者数も限られていました。しかしながら、紛争が繰り返されるなかで、また、1979年のウガンダにおけるアミン政権の崩壊、1983年から第二次スーダン内戦の勃発、1991年のエチオピアでの政権交代とソマリア内戦の開始などの近隣諸国の内戦や政変の影響等により、国家の治安部門により管理されていた武器が、軍人や商人、避難民などの手を通じて民間部門へ大量に流出し、銃や自動小銃が南スーダンにも流入するようになり、遊牧民の世界にも普及していったのです。そして、遊牧民にとって牛に加えて、銃が重要な資産となっていったのでした。

銃の拡散は、牛の強奪の在り方を変えるとともに伝統的な統治システムをも変えることとなりました。牛強奪による事案とそれに伴う死傷者数は、銃の流入により飛躍的に増加しました。銃を用いることにより、牛強奪がしやすくなるとともに、自分たちを守る重要な武器となり、力となったのです。また、銃を手にした若者はその力を背景に年長者の権威に従わなくなり、それまでの家父長制による伝統的な統治システムは徐々に変容していったのでした。そして、銃を手にした遊牧民はそれぞれの民族で自分たちの身を守る自衛団を形成し始めました。自衛団で有名なのがヌエル族のWhite Armyやディンカ族では、titweng(牛の守護人：protectors of the cattle)です。

そして、牛をめぐる遊牧民の社会文化に銃が入り込むことにより、遊牧民と政治家や将軍などの権力を有するものとの関係をより一層強化することになりました。遊牧民は牛が最も優先される資産であり、有力者と牛を大事にする民族や個人とをつなげるものです。そのため、有力者は銃と牛を牛飼いに与え、牛を守らせ、維持させます。具体的にはジュバでの実力者は故郷で多数の牛を獲ており、それを牛飼いに世話させています。そこで牛が亡くなれば、それを補填すべく牛強奪をするのです。その牛強奪のための攻撃手段もジュバの実力者が供与することもあります。牛飼いは、実力者から牛を与えられ、牛飼いは、婚資にしたりします。そして、その関係は有力者と牛飼いととの関係にとどまらず、戦闘にも若者は駆り出されるのです。

このように、政治家や将軍といった有力者と地域における牛飼いとといった主従関係が存在し、その力の源泉は牛でつながっています。このことは、政府側のみならず、反政府側も同様な関係を構築しているのです。したがって、ジュバで民族を代表する大統領を中心とする政府側と異なる民族を代表する元副大統領の争いが起こると、末端までつながっている主従関係にある民族の集団が蜂起し、民族間への紛争へと発展してしまいます。例えば、ディンカ族とヌエル族はライバルであり、お互いに牛強奪を行ってきており、多くの犠牲者も発生しています。また、それぞれは自衛団を有しており、そのようななかで、大きな衝突が起こると紛争へとつながってしまうのです。

実際に、スーダン人間の安全保障ベースライン評価（HSBA）において、小火器調査が行われており、銃器の影響が報告され、近年の民兵への若者の大規模な勧誘の詳細について示されています。また、Rolandsen（2007）は、どのように若者の構造がSPLM / Aの統治によって道具化されているかを報告しています。若者が大量に兵士として勧誘された事例は、枚挙にいとまがありません。Pendle（2014）やHutchinson and Pendle（2015）は、南スーダンの内戦が始まった2013年の数カ月間に、何万

人も牛飼いである若者たちが組織的な暴力に動員されたことを報告しています。年齢組制に基づくこの制度的な戦闘能力は国家構造の外に存在し、そしてDeleuzeとGuattari（1984、1987）が「戦争機械」と呼ぶもの、つまり、国家に関連して、そして国家の外部にあるにもかかわらず、権力を肯定する分節社会による地域的メカニズムは国が確保と利用を求める若者による集団的暴力のための権力を与えているのです。

このように、南スーダンの紛争の歴史には民族間の対立や若者との関係が密接に関わっています。このことがエドワード・スポーツ局長の述べた「今の南スーダンには州や民族を超えた繋がりが必要です。」とし、「国民結束の日」を開催したいとした背景にありました。なお、『スポーツを通じた平和と結束；南スーダン独立後初の全国スポーツ大会とオリンピック参加の記録』（2019）佐伯印刷では、自身の経験を踏まえて、なぜ同国で紛争が繰り返されるのか、なぜ平和構築のために「国民結束の日」支援なのかを解説し、大会開催までの険しい道のりや国外退避時の状況、そしてリオデジャネイロオリンピックが南スーダン人にとってどのような意味を持つものであったのかについて、当時のエピソードとともに綴っていますので是非、手に取ってみてください。



「国民結束の日」は成功したのか



今週は、元JICA南スーダン事務所長で、現在静岡県立大学国際関係学部教授の古川 光明 (<https://m.facebook.com/profile.php?id=100015842526653>) さんによるご投稿の第3回目です。

是非、お楽しみください。

(2022年7月1日投稿)

「国民結束の日」は本当に効果があったのか。

今回は、「国民結束の日」開催の背景にある南スーダンの紛争の歴史には民族間の対立や若者との関係が密接に関わっていること、そして、民族間の融和や民族間の信頼、特に若者の信頼を醸成するために、「平和と結束」をテーマとする「国民結束の日」が開催されたことを記載しました。そして、独立後初となる「国民結束の日」は、様々な困難が立ちだかるなか、成功裡に終了し、その後の開催についても、関係者は確かな手ごたえを感じることができました。しかしながら、援助関係者が気をつけなければならないことはそれが決して自己満足で終わってはならないということです。当事者にとっては成功したと思っても、第三者にとっては、それが、本当に効果があったのかはわからない。ましてや、関係者の一人よがりの満足であっては

ならないのです。この懸念を払拭するためには、「国民結束の日」が、我々が期待した効果につながったのか、今後も継続する価値があるのかなどについて、科学的な検証などを踏まえた裏付けをしていかなければなりません。そこでJICA緒方貞子平和開発研究所の「スポーツを通じた平和・開発のための研究」プロジェクトの一環として、その検証を行うことになりました。効果検証にあたっては、2020年1月に開催された第5回「国民結束の日」を対象とすることとなりました。調査にあたっては、参加した選手たちへのアンケート調査、また、選手やコーチ、開催を支援した大会関係者（MOCYS、JICA、UNDP、UNMISSなど）との対話によるインタビュー記録をもとに、分析を行いました。分析では統計分析による定量的な検証とインタビュー結果に基づいた定性的な分析を行いました。今回は2回に分けてこの検証結果をお伝えしたいと思います。今回は選手達への効果、次回、「国民結束の日」が開催されたジュバ市民への効果について紹介します。ただし、いずれも、回帰分析などの分析過程に関しては割愛し、その結果のみをお伝えすることとします。



スポーツは、ポジティブな効果とネガティブな効果の両面を有しています。「平和と社会的結束」をテーマとして開催された「国民結束の日」が場合によっては、選手達の他の民族に対する複雑な感情や政府に対する緊張感をさらに助長する危険性をはらんでいます。しかし、実際には、「国民結束の日」によって他地域の人に対して感情的な壁を持っている選手も含めて、徐々に会話をし、連絡先を交換したり、スポーツ用具を共有したりと選手間の交流が促進されていったことがわかりました。そのなかで最初是他民族に対して猜疑心を持っていた選手たちが、徐々にお互いの信頼関係を構築していったことが示されました。そして、「国民結束の日」は、スポーツや共同生活を通して、お互いを知り、尊重し、平和に暮らすことができるという「共存の疑似体験」の場を選手たちに供給したといえます。紛争により、他地域に行くことが制限され、他民族との交流がなされないなか疑似体験であっても平和で安全な共存の場を構築することが民族融和に向けていかに大切なことであるかを示しています。

そして、選手たちは、それぞれのコミュニティに戻ってからも、「国民結束の日」で仲良くなった選手たちと連絡を取り合うなどしてコ

ンタクトを保ち、個人レベルでできるところから社会的結束に向けての行動を起こしていることがわかりました。これは、約10日間という短い期間でありましたが、濃密な時間を共に過ごしたことで得られた効果が、その後も維持されていることの一つの証左だと考えられます。

そして、「国民結束の日」を通じて「共存の疑似体験」を体験し、その経験を地元のコミュニティにも広めようとしています。親や友人を含めてコミュニティへの自らの経験を伝達することを通じて、他民族への理解が促進され、他民族に対する否定的な固定概念が改善されることにつながる可能性があります。つまり、個人に蓄積された信頼やネットワークといった社会関係資本は、個人の枠を超えて、コミュニティのなかでも蓄積され、社会的結束につながっていく可能性を有していることがわかりました。

このように南スーダンのような紛争で深く分断された社会であっても、スポーツ大会によって他民族との架け橋となる社会関係資本が強化される可能性があること、また、「国民結束の日」は、南スーダンにおいて、スポーツイベントが平和的共存のための安全な空間を提供することで、民族間の和解を促進する可能性があることが示されました。

「国民結束の日」 ジュバでの効果

今週は、元JICA南スーダン事務所長で、現在静岡県立大学国際関係学部教授の古川 光明 (<https://m.facebook.com/profile.php?id=100015842526653>) さんによるご投稿の第4回目です。
是非、お楽しみください。

(2022年7月16日投稿)

「国民結束の日」の開催地ジュバ市民への効果

今回は研究対象を選手からジュバ市民に広げ、第5回「国民結束の日」のジュバ市民への効果について紹介することにします。南スーダンでは、独立後の2度の紛争はいずれもジュバの衝突から勃発しました。大規模な戦闘が繰り返されるなかジュバにおいても多くの犠牲者が出るなか、民族的な緊張感が高まっています。そのようななかで、果たして「国民結束の日」の目的である参加選手のみならず、観客がスポーツを楽しみ、平和(スポーツ

が出来る環境)の重要性を感じ、南スーダン国民意識の醸成などの「国民結束の日」が掲げる目標が達成されたのかを検証することにしました。

検証にあたっては、JICA緒方貞子平和開発研究所の「スポーツを通じた平和・開発のための研究」プロジェクトの一環として、ジュバ市民を対象とした第5回「国民結束の日」の効果を測定するために、大会前後のパネル調査を実施しました。

大会前の調査は、2020年2020年1月15日から1月23日、大会後は、2020年2月24日から3月2日にかけて行いました。パネル調査では808人のジュバ市民に調査を行い、そのうち718人に再連絡を取ることができました。調査では、調査対象者全員から調査許可を得ました。最終的に、大会の前後に連絡が取れた718人のパネル・サンプルのうち、大会の後に「国民結束の日」について知ったと答えた回答者は497人(サンプルの69%)でした。





「国民結束の日」について知っているとした回答者のうち、「国民結束の日」をフォローしたと答えた回答者は364人でした。したがって、全サンプルの内訳は、「国民結束の日」をフォローしたと答えた回答者が51%、「国民結束の日」をフォローしなかったと答えた回答者が49%となります（つまり、フォローしたと答えた364人、フォローしなかったと答えた354人です）。以下の分析では、この「「国民結束の日」をフォローしている」市民をフォローアーとし、「フォローしていない」という状態をノンフォローアーとして、第5回「国民結束の日」の影響を評価する手段として用いました。

検証の結果、紛争により分断された社会のなかにおいても、「国民結束の日」は市民のスポーツへの関心や参加を高め、平和と結束への意識を醸成させることが示されました。それとともに、「国民結束の日」は、政府への信頼を高め、多様な民族の若い選手たちが一堂に会するなかで行われた競技をフォローすることにより、また、敵対する選手たちが平和と結束のために集まり、フェアプレー精神に基づいて競技をする選手たちの姿を見ることにより、平和と結束への認識や他民族に対する紛争への認識を緩和する効果があることが示されました。そして、「国民結束の日」を通じて、国民の一体感が生まれ、ジュバ市民の南スーダン人として

の国民意識が高まったことも注目に値すると思います。

この結果は、治安の安定していない深く分断された国においても、「国民結束の日」を通じて選手のみならず、広く国民にスポーツの持つ力が再認識されスポーツが社会的結束を高める可能性があることがわかりました。また、「国民結束の日」に参加した選手たちのみならず、「国民結束の日」を観戦したジュバ市民にとっても「国民結束の日」は「共存の疑似体験」を提供していることもわかりました。ジュバ市民への「国民結束の日」の効果は、「国民結束の日」がスポーツ大会に参加する選手たちのみならず、観戦するなどのフォローアーに対しても発現されており、社会的結束の一助となることが示された。つまり、治安の安定していない深く分断された社会での平和構築支援を考えるうえでスポーツやスポーツ大会が重要なツールとなり得ることを示す結果となりました。

このように、これまで「国民結束の日」に関わった関係者の「平和と結束」への確かな手応えは、科学的な検証によって裏付けることができました。今後も「国民結束の日」が継続的に開催され、そして、いつの日か、南スーダン全国で平和な暮らしのなかで、毎日、スポーツを楽しめる日が来ることを願っています。

「国民結束の日」開催支援



今週は、JICA南スーダン事務所の吉田祐樹さんによるご投稿です。是非お楽しみください。

(2022年5月6日投稿)

平和と社会融和のために！「国民結束の日」
スポーツ大会 ～南スーダン～

JICA南スーダン事務所 吉田祐樹企画調査員

こんにちは！JICA南スーダン事務所で平和構築・ガバナンス分野を担当しております、企画調査員の吉田祐樹です。

JICAは2016年から、南スーダンの首都ジュバにおいて、全国的青年男女アスリートの代表が参加する「国民結束の日」（National Unity Day: 以下NUD）スポーツ大会の開催を支援してきております。戦後日本で始まった国民体育大会（国体）のようなスポーツの祭典をイメージして頂くと良いかと思います。

本年も3月19日～27日の9日間にわたって、第6回目のNUDが盛大に開催されました。本大

会は、新型コロナウイルス感染症拡大のため2年越しの開催となりましたが、「スポーツを通じた平和と社会融和」とのテーマを掲げ、主催者である南スーダン青年・スポーツ省のリーダーシップの下、各スポーツ競技連盟、当地国連機関、協賛企業などが一致団結し、感染予防措置を講じつつ、コロナ禍での大規模イベントの開催を実現することができました。



本大会では、国内各州における厳正な選考プロセスを経て選抜された20歳未満の選手372名が、男子サッカー、女子バレーボール、男女陸上競技に参加しました。首都ジュバに到着した時は、新しく出会う他民族・他地域の人を警戒する様子を見せていましたが、試合中の選手の眼差しは真剣そのものであり、試合終了後には互いの健闘を認め、称え合っていました。また、合宿所での共同生活や、競技を通じて徐々に、お互いの距離を縮めていき、真の友情を築いていく姿が印象的でした。

また、パラスポーツ（重量挙げやテコンドー）や「ボルボル」と呼ばれる南スーダン版の女子ドッジボールの実演が行われるなど、障がいやジェンダーの差異を超えた多様なスポーツ文化の紹介を通して、参加者に包摂性への理解を深めてもらう機会になりました。

更に、NUDの恒例行事である「平和促進ワー

クショップ」では、平和、紛争解決、ジェンダーなどの問題について選手たちが活発に意見交換する姿がみられ、南スーダンが直面する様々な社会課題の解決を考えるきっかけとなりました。

スポーツにはあらゆる差異を超えて人々をつなぎ、一つにする大きな力があります。加えて、競技を通して、協調性、公平性、責任感、相互扶助や尊重など、良き市民として南スーダンの発展に貢献するために重要なメンタリティを身に付けることができると考えます。今後もこのスポーツの持つユニークな力を最大限に活用して、南スーダンの人々に対して平和と社会融和のメッセージを発信し続けていきたいと思えます。未来を担う若い世代がお互いを尊重し合う、紛争の再発しにくい社会の実現に、一步でも近づいていくことを願います。



スポーツ振興と平和促進



今週は、JICA南スーダン事務所企画調査員の吉田祐樹様からの投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年10月28日投稿)

南スーダンの更なるスポーツ振興と平和促進を目指して！
～南スーダンスポーツ行政関係者による本邦研修の実施～

こんにちは！JICA南スーダン事務所企画調査員の吉田祐樹です。

JICAは、10月6日～19日にかけて、南スーダン政府やスポーツ連盟関係者ら14名を日本へ招待し、スポーツ関係者との意見交換や、スポーツ関連施設への訪問などを通して、南スーダンのスポーツ振興に役立ててもらうべく、研修を実施しました。今回はその一端をご紹介します。

一行はまず群馬県前橋市を訪問しました。前橋市は昨年の東京オリンピックに出場した南スーダン陸上選手が長期事前キャンプを行った地で、オリンピック終了後も、同市はスポーツ分野における南スーダンに対する協力について検討して下さっていました。今次訪問に合わせて、同市と南スーダンとの間で新たなスポーツ交流に関する協定書が署名され、来年以降南スーダンのスポーツ選手を受け入れて頂くことになりました。南スーダン

側代表のピーター・バプティスト・アバカル青年・スポーツ省事務次官は、「前橋市やJICAをはじめとする日本の関係者に、100回ありがとうございましたと言いたいくらい感謝しています」などと熱い思いを語られ、間近で聞いていた私も圧倒され、感激しました。

東京に戻ってからも、一行は多くのスポーツ関連機関を訪問しました。その中で最も盛り上がった行程の1つは、スポーツ庁と日本スポーツ協会を訪問した際に受けた、日本の国体に関する講義でした。なぜなら、国体は、JICAが支援している南スーダンの国民結束の日スポーツ大会（National Unity Day: NUD）とよく似た性質を持っているからです。全国からトップアスリートが開催地に集う国体とNUD。その目的はどちらも、戦後社会に生きる若者にスポーツを通して夢と希望を与えることでした。講義後の質疑応答では、国体のスポンサー集めや必要経費確保の方法、中央政府と開催都市の役割と責任、多くの試合数を短期間で効率良く実施する方法等、非常に具体的かつ実践的な質問が飛び交い、日本の経験とノウハウを南スーダンに少しでも多く持ち帰りたいという積極的な姿勢に感動しました。来年開催予定の第7回NUDでは、日本で学んだことが大いに活かされることを期待しています。



また、関東の小学校や中学校を訪問し、保健体育の授業や部活動の様子を見学しました。南スーダンの学校では、時間割には体育は含まれているものの、体育専任の教員はおらず、別の教科の教員が片手間に子どもたちを運動させたりしている状況が散見されます。日本の保健体育の授業が明確な指導要領・計画に基づいて実施されていて、教員が愛を持って生徒に接している姿を通して、参加者の1人は、「日本人は小さい頃からこのようにしっかり体作りをしているので、健康で長寿なのだ」と語ってくれました。

私もこの研修に同行させて頂き、純粋にスポーツを楽しんでいた幼少期の頃を思い出しました。日本では子どもから大人まで、あらゆる人があらゆるスポーツを楽しめる環境が整っていますが、南スーダンでは、例えば治安の問題、スポーツ施設や機材不足といったことが障害となって、誰でも気軽にスポーツができる状況ではありません。今回研修に参加した南スーダンのスポーツ関係者がリーダーシップをとって、スポーツを取り巻く環境が少しでも向上していくことを切に願うとともに、JICAとしても彼らの努力を今後も後押ししていきたいと考えています。

農業支援

今週は、JICA南スーダン事務所の平田民子さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年5月13日投稿)

JICA南スーダン事務所の平田民子と申します。JICAは2011年の独立以前から、南スーダンへの開発協力を行ってきました。

今回はここ10年間、南スーダンのひとつとともに歩んできた農業分野での取り組みについてご紹介します。

南スーダンはナイル川、世界有数の湿地帯「スッド」、95%が農業に適していると言われる肥沃な土壌、人口（1200万人）より多い家畜（牛1200万頭、羊2000万頭、ヤギ2500万頭）、国土の3割を占める森林とともに豊かな自然資源を有しており、農林畜水産業のポテンシャルが高いと言われています。これらのポテンシャルを開発計画としてまとめたのが、2012年～2017年にJICAが策定支援を行った「包括的農業開発マスタープラン」(CAMP)と「灌漑開発マスタープラン」(IDMP)です。これらは、全国で行ったフィールド調査のデータや地方行政官、ドナー含む多くの関係者との協議に基づいた25年間の長期的な農業開発の青写真が描かれています。

独立後、暫定議会での政策や法案の審議が停滞する中、これらのマスタープランは国として重要度・優先度の高いものとして、2017年に南スーダンで初めての国家農業開発計画として国会で承認されました。

一方で、この計画を実施するには基本的な法律・規制等の政策枠組みやそれを運用する中央・地方行政官、普及員や予算等の多くのリソースが必要です。また、農業の主役である農家や民間企業、それらを支えるドナー・NGOが活動するための環境整備も不可欠です。そこで、2017～2022年には、中央行政官をカウンターパートとして「CAMP/IDMP実施能力強化プロジェクト」を実施しました。これは年度予算計画・中期戦略の策定、資源動員、法整備等の組織強化、またそれらを現場で試行するためのパイロット事業を行いました。専門家の方々の10年間の弛まぬ日々の協力について、ぜひこちらをご覧ください。

南スーダンで農業の発展を支える基盤を作る：10年の取り組みを経て、開発マスタープランが実行へ | 2022年度 | トピックス | ニュース -

JICA<https://www.jica.go.jp/topics/2022/20220414_02.html>





今年3月からは、「食料安全保障・生計向上のための農業振興・再活性化プロジェクト」が始まりました。現在、首都ジュバの市場で売られている8～9割の野菜・果物は近隣ウガンダ、ケニアから輸入されています。ジュバ近郊で暮らす人々の食料増産・生計向上のため、園芸・きのこ栽培、養殖、養鶏分野で適正な栽培・生産、マーケティング技術を特定・普及し、最終的には都市近郊型農業をモデル化していくことを目的としています。まだまだ詳細計画段階ですが、この10年間耕し種を蒔いてきた政策分野の協力を基盤に、今後、実際に現場でどうしたら良い芽をだし、美味しく栄養のある果実が収穫できるか、カウンターパート、専門家や関係者と協議を進めている最中です。



そして、持続的な農業開発を実施していくには、平和と安定が必要不可欠です。南スーダンで暮らす8割以上が農業・牧畜を主要生計手段としていると言われています。一方で、今年4月～7月までに774万人（国民の63%）が食料危機に陥り食料援助を必要としている現状もあります。この背景には、長引く地方での部族間衝突や伝統的な牛強奪による被害、気候変動による洪水被害、干ばつ、マクロ経済危機、また度重なるこれらの打撃による人々の資産・生計手段の減少があります。不安定な情勢では、人々は安定・安心して生活できる土地や家屋を持つことができず、農業に投資する余裕はありません。実際に今も230万人が国外に避難し、200万人が国内避難民となっ

ています。和平合意の着実な実施を通じて、平和な日常が戻り、農業が人々の日々の食料生産や生計手段となり、やがて産業基盤として南スーダンの経済を牽引していけるよう願うばかりです。カウンターパートはお腹が空いている人（hungry people）は怒りっぽい（angry）という表現を度々しますが、農業は平和と安定を着実なものにしていく役割も持っていると思います。JICAの協力を通じて、新鮮な野菜、肉・卵、魚がジュバ近郊、ひいては全国の人々に届き、若者や女性が農業で稼ぎ、おなか一杯の子供たちが元気に走り回る、そんな未来を描きつつ、関係者と一緒に話し合いながら協力を進めていければと思います。



農業技術協力CAMP

今週は、先週に引き続きJICA南スーダン事務所の平田民子さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年5月20日投稿)

今回は農業分野の技術協力「CAMP/IDMP実施能力強化プロジェクト」で生産・運営環境整備を行った中央エクアトリア州農業・環境・森林省の苗畑について紹介します。

この苗畑は大使館やJICA事務所がある南スーダンの首都ジュバ市内、ナイル川支流沿いに位置しています。日本でも高級家具材として知られているチークなどの経済価値の高い樹木、パパイヤ、マンゴーなどの果樹や観葉植物約85種を生産しており、2021年度は約1万5千本を生産しました。プロジェクトでは、作業場や販売所の建設、水タンクの設置、日・雨除けシェードの設置や改修による設備の拡充、優良品種の導入、スタッフに対する接木、病害虫管理、土壌改善等の生産技術研修を通じて、生産・運営環境の改善を行いました。これらの活動により、苗木の生産力が増強され、南スーダンにおける森林資源の回復やアグロフォレストリーが推進されることを通じて、人々の生計向上や気候変動対策に貢献することが期待されています。

本事業の基本設計は2016年に始まりましたが、その後の武力衝突やCOVID-19感染拡大等による影響で、2022年1月に6年越しの事業完了となりました。「包括的農業マスタープラン（CAMP）」を基に、プロジェクト設計時から関与してきたカウンターパートと専門家の協力が目に見える成果として発現され、関係者の達成感もひとしおです。本事業には、中央と地方政府関係者が計画から実施まで関与しており、両者の南スーダンの農業開発に向けた密な連携と協働が成功の鍵でした。





整備された施設の引渡式典では、州副知事、中央・州政府関係省庁大臣を含む多くの農林業関係者が参加し、苗畑生産・運営環境の改善を盛大に祝いました。式典には女性の大臣が3人参加したこともあり、南スーダンの開発における女性の活躍を祝福・推進する機会ともなりました。当地では、大臣など高官はスピーチ終了後すぐに式典を去るのが常ですが、本式典では、終了後も女性大臣らと現場の女性スタッフたちとの祝福のダンスと歌がしばらく続くなど、始終賑やかな時間となりました。参加した大臣が現場スタッフに対するねぎらいとして700ドルをボーナスプレゼントするというハプニングもあり、会場は多いに盛り上がりました。

生産された苗木は市民向けに販売されており、例えばマンゴーの苗木は一株SSP500(約1.2ドル)です。JICAの無償資金協力で建設されたジュバ市の新しい橋フリーダムブリッジの土砂崩れ防止にも、この苗畑で生産された芝草を貼る、という引き合いもありました。現在は個人のお客さんが主ですが、今回増強された生産体制を踏まえ、将来的にはNGOや企業等の大口顧客と契約栽培を実施していくことを目指しています。

また、苗畑には南スーダンに生育する樹木や、外国から導入された樹木など様々な木が植えられています。独立前のスーダン時代にハルツームから移植されたメリアなどの木々もあり、もともと樹木園であったことから、植物園や研究所のような役割も持っています。日差しの強い南スーダンですが、高々と立つ木々からマイナスイオンをたっぷり感じる事ができる癒しの場所です。苗木を買いに来た方々が休憩するカフェを併設するアイデアもあり、私も南スーダン産のコーヒー・紅茶を飲みながらどの苗木を買うか考える、そんな日を楽しみにしています。

樹木を育てる林業は現金を手にするまで数十年が必要なので、このような産業の推進には平和と安定の定着が欠かせません。今の生活を立てつつ、中長期的な視点を持ってこつこつと木を育成する、地道ですが、明るい未来を描く希望のあふれた活動です。今後も、南スーダンの農林業開発にこの苗畑をどのように活用していくか、関係者と協議していく予定です。

ナイル架橋建設プロジェクト

今週は、JICA南スーダン事務所の山根誠次長によるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年5月27日投稿)

2012年より進められてきた南スーダン・ジュバ市でのナイル架橋建設プロジェクトが5/19に遂に完工を迎えました！

この橋は、平和と自由、そして明るい未来への期待を込めて、現地の人々に「Freedom Bridge=フリーダム・ブリッジ」と呼ばれています。

開通式は、キール大統領、マシャール第一副大統領をはじめとする政府首脳、堤尚広大使、

就任後初の海外出張として日本から駆けつけた田中明彦JICA理事長らが一堂に会し、各国代表、来賓、建設に従事した関係者、喜びに沸く多くの市民が見守る中、テレビ中継、オンライン生配信を伴う国家的大イベントとして盛大に執り行われました。

開通式とフリーダム・ブリッジの建設を巡るストーリーはこちら↓をぜひご覧ください。

南スーダンの悲願だった平和と自由の象徴「フリーダム・ブリッジ」が完成 | 2022年度 | トピックス | ニュース - JICA

https://www.jica.go.jp/topics/2022/20220520_01.html



フリーダム・ブリッジ建設は、度重なる紛争やコロナ禍により、計3度、約5年間に及ぶ中断期間を乗り越えて完成しました。「次に何が起こってもこの橋を完成させるまでは決してこの地を離れない」という固い決意を常々口にしながらこのプロジェクトに取り組まれていた日本人技術者の皆さんとともに、JICA南スーダン事務所一同は、万感の思いで南スーダンにとって歴史的な一日を迎えることになりました。

●式典の中継動画はこちら→南スーダン公共放送（SSBC）による式典中継動画

<https://fb.watch/d5NaFZMXed/>

●JICA南スーダン事務所のFacebook

<https://www.facebook.com/jicass0709/>



きれいな水供給プロジェクト

今週は、株式会社TECインターナショナル
山田 紹子様からの投稿です。是非、お楽しみ
ください。

(2022年10月21日投稿)

今回はJICAが南スーダンで行っている水道分
野の技術協力「ジュバ市きれいな水供給プロ
ジェクト」の活動を紹介します。

本プロジェクトは、ジュバ市に給水してい
る南スーダン都市水道公社（South Sudan
Urban Water Corporation、SSUWC）の水
道事業運営能力の向上を支援するプロジェク
トで、2010年から実施された「SSUWC水道
事業管理能力強化プロジェクト」フェーズ1、
フェーズ2に続くものになります。

SSUWCはジュバにある一日当たり7,200m³
の水生産能力を持つ浄水場を運営していますが、
人口の増加、配水管網の老朽化もあり、

ジュバのごく一部の住民にしか給水できてい
ません。JICAの無償資金協力プロジェクト
「ジュバ市水供給改善計画」により、現在新
規浄水場を建設中が、2023年初めに完成する
と、一日当たり10,800m³の水が供給可能と
なり、新たに35万人のジュバ市民が安全な水
にアクセスできるようになります。本プロ
ジェクトでは、既存施設と新施設が適切に運
営・維持管理され、持続可能な運営ができる
よう、SSUWCをJICA専門家である私たちが技
術支援しています。





フェーズ1開始時は国がスーダン共和国から独立後間もない時で、SSUWC職員の知識・技術、様々な関連能力、維持管理資機材、予算の欠如・不足という、ないない尽くしの状況のもと、3年の活動で水道事業運営の基礎を整えました。しかし、いまだ自立して運営ができる組織にはほど遠い状況のためフェーズ2が計画されたのですが、2013年12月の政治リーダーに同士の対立に起因する戦闘勃発により、開始に至りませんでした。

ようやく治安が鎮静化した2016年2月にフェーズ2を開始したものの、開始後5か月で再びジュバ市内で戦闘が始まり日本人専門家の退避を余儀なくされ、活動は再度停止しました。現地治安状況がなかなか改善しない中、現地に入らずに技術協力を続けるため、南スーダン以外の第三国（ケニアおよびウガンダ）にSSUWC職員を招聘する遠隔研修を決定しました。2017年11月から2019年3月まで、都合11回、延べ329人が参加、効率的で効果的な研修をすることができました。特にケニアおよびウガンダでの水道事業改革に関する講義、経験の共有によりSSUWC及び管轄する水資源省トップの意識変化があり、積極的な水道事業への参加が促進されました。また、他国の事例からSSUWCに適用できる改善策について彼ら自身で検討・協議し、自律的な改善行動計画と年次計画の作成・実施に繋がりました。2019年4月からは現地活動を

再開したものの、2020年3月以降はコロナ禍によるオンラインでの活動に限定、2021年7月以降限定的に現地活動を再開できましたが、フェーズ2は主に遠隔研修、オンラインでの業務に留まりました。

2022年3月から開始した本プロジェクトは、新施設が2023年初めに完成することを受け、SSUWCの給水サービス提供能力を強化することを目標に以下の活動を実施しています。①持続可能な運営のためのビジネスプランの策定・実施支援、②新施設・既存施設の運営維持管理能力の向上、③新たに建設される市内8か所の給水車給水拠点、120か所の公共水栓の運転管理体制・水道料金徴収体制の構築です。現状ではSSUWC職員は国家公務員で、国からの給料は低く遅配が続く上、職員の増減・昇進すべてに国の承認が必要で、柔軟な雇用ができません。新たに策定中のビジネスプランでは、SSUWC自身が職員の給料、電気代・薬品を含む施設の運転維持管理費すべてを水道料金収入でカバーし、独立採算に向けた道筋を整えることが最終目標です。また新たに建設される給水車給水拠点と公共水栓は数も多く、SSUWC直接の運転管理は難しいことから、民間に委託することを決定し、現在会社の選定をしているところです。既存及び新施設からしっかりと水道料金を徴収することで収入を増加させ、SSUWCの安定した財務体制を整えます。

私自身はフェーズ2から財務専門家として従事し、本プロジェクトで業務主任を務めさせていただいています。フェーズ2の時から感じていますが、2度の紛争、南スーダン通貨の急落、4～5か月の給料の遅配、給料水準の悪化という苦しい状況の中にも関わらず、SSUWC職員のモチベーションの高さを実感しています。不法接続・メーター検査委員会を自身で設立し、チームで顧客を一軒一軒訪問、給水状況の確認、メーター稼働確認・交換・設置、未

納金の督促等、水道料金徴収改善活動を始めたことには驚きました。こういったモチベーションの高さは現在も感じており、それをさらに高めるべく安定した給料、パフォーマンスに応じた各種手当等を含めたビジネスプランを作成、実施を支援すべく活動しています。

“きれいな水がジュバ市民に届くまであともう少し！”。より多くの人々が、安全できれいな水を安定して供給できるようSSUWCを支援していきます。



地方行政能力強化

今週は、JICAガバナンス・平和構築部 平和構築室 松野素子様からの投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年11月4日投稿)

広島、東北から南スーダンへ

ー地域復興への想いと経験を繋ぐー

紛争の影響を受けた地域社会を再建し、平和で安定した紛争が再発しない社会を目指すために、JICAは日本の地方自治体や大学などと協力して、南スーダンの地方行政能力強化にかかる協力を行っています。

先月10月19日～25日には、南スーダンの議会担当省大臣、州知事、地方自治理事会代表など8名の代表団の皆様がJICAのプログラムで広島県の東広島市を訪問しました。

代表団は、広島県副知事をはじめ、広島の地方自治体関係者との意見交換や、平和記念資料館と平和記念公園の訪問などを通じて、広島

の戦後復興・開発のあゆみと復興に向けて

地方行政の果たした役割について理解を深めました。

原爆投下直後の悲惨な被害状況の中で、広島

島の地方自治体がリーダーシップを持ち、復興に向けて粘り強く取り組んできた経験は、南スーダンの代表団の胸にも強く響き、自国、自州の復興に向けて大きなモチベーションの向上になった様子でした。

東広島市では、東広島市長と市のビジョンについて意見交換を行うとともに、住民参加型の総合計画策定のプロセスや、行政が単独ではなく、住民と協働で取り組むことで多様な地域の課題やニーズに対応している事例などの説明を受けました。

また、東松島市の東日本大震災後の行政と住民の協働によるコミュニティ・地域の復興についても、当時東松島市で復興計画を策定していた宮城県の高橋県議から実体験に基づく経験と教訓、南スーダンへの熱いメッセージを伝えていただきました。



プログラム全体を通じて、広島や東松島市の経験や取り組みを南スーダンで応用するために、非常に活発に質問や意見が飛び交い、ほとんどのセッションで予定時間を超過してしまうほどでした。広島、東松島市、南スーダン各州では、置かれている状況は違えど、困難な状況の中で自分たちの地域の開発、コミュニティ復興を目指す共通の想いが通じ合い、双方にとって貴重な学びの機会になりました。

最終日には、代表団の皆様から、地域復興のためには、住民との協働が重要であること、そのためには住民から信頼される行政となるため、透明性のある計画策定や住民参加型の取り組みが必要であることに気づかされた、自州においても実践していきたい、など今回のプログラムの学びと今後に向けた考えを発表いただき、1週間の短

い期間であったにも関わらず、多岐にわたる気づきと帰国後の学びの活用について検討いただいていた様子に感激しました。地方行政のキーパーソンである中央政府機関と州知事、州地方自治省大臣が、広島、東北の復興の経験と想いを受け継いでくださったことは、南スーダンの地方行政の改善に向けて大きな一歩になったのではないかと思います。

南スーダンの地方行政官は、不安定な治安状況と予算不足など非常に厳しい状況の中で、対応すべき課題・ニーズは山積みです。JICAは、地方行政官向けの研修の実施や現地への日本人専門家の派遣などを通じて、南スーダン政府、地方行政官の想いに寄り添いながらより一層力強く支援していきたいと思っています。



税関能力強化プロジェクト

今週は、JICA「南スーダン国税関コード導入による税関能力強化プロジェクトフェーズ2」チーフアドバイザーの沼口三典様によるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年10月14日投稿)

はじめまして、JICA「南スーダン国税関コード導入による税関能力強化プロジェクトフェーズ2」チーフアドバイザーの沼口三典です。

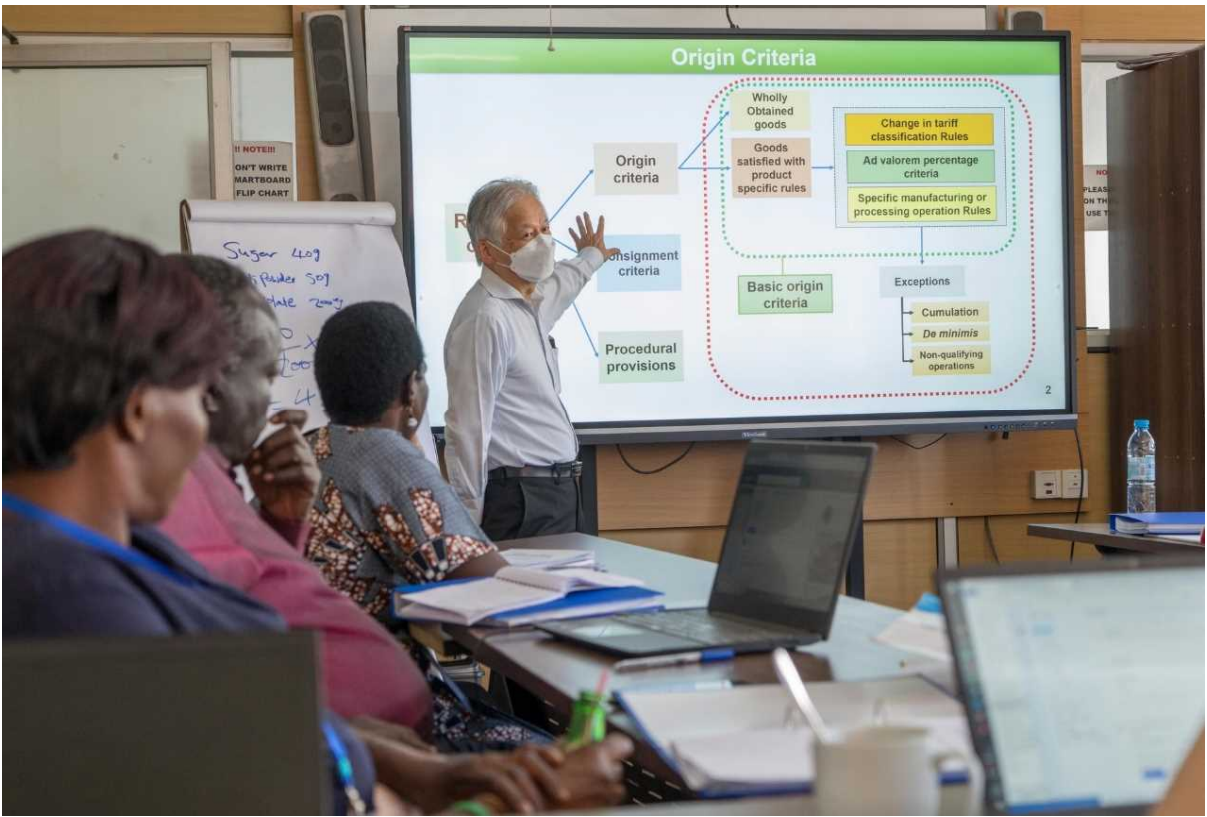
私は2016年から南スーダンの税関手続きにHSコードを導入するための協力に携わっています。これまでにフェーズ1（2016年～2019年）を終え、現在フェーズ2（2020年～2023年）を実施しています。

「HSコード」とは、世界の200カ国以上で貿易に利用されている6桁のコードのことで、取引されるすべての品物に付番されます。HSコードは、①関税の税額の確定（コード毎に税率が規定されています。）、②貿易統計（コード毎に取引額や数量を集計します。）、③国際的に取引を規制する品物の特定など、に活用される、税関行政を進める上での基礎となるコードです。

プロジェクトが始まるまでは、南スーダンでは税関手続きにHSコードではなく物の名称

（「自動車」、「携帯電話」、「TV」など）が使われていました。そのため、税関職員によって分類が異なり、誤った課税が行われるなど、周辺国との貿易統計の比較等もすることができませんでした。しかし、プロジェクトが始まり、フェーズ1終盤の2018年末には首都ジュバにHSコードが導入され、適切な課税や貿易統計の作成が行われるようになりました。フェーズ2開始後の2021年には、南スーダン最大の取引量を誇る南部のウガンダ国境・ニムレにおいてもHSコードが導入されました。現在は、西部や北部での導入を目指しています。





プロジェクトでは、HSコードに加えて「原産地規則」の導入も支援しています。HSコードにはコードごとに税率が決められていますが、原産国によって税率が異なることがあります（優遇税率）。そのため、原産地に関する規則が条約や協定で決められています。適切な課税には、この原産地規則の運用も重要となります。

プロジェクトの活動は主に税関職員と通関業者への研修で、現在のフェーズ2では449人の税関職員と265人の通関業者に対

してHSコードと原産地規則の研修を行いました。HSコードに関する研修はフェーズ1で養成された南スーダン人職員が講師を務め、自立的な能力強化が行われています。

これまでの協力を通して、南スーダン税関職員や通関業者の国を良くしたいとの意欲やプロジェクトに対する期待を感じています。このような前向きで積極的な反応に応えるため、今後も税関職員・通関業者に対する能力強化を通じて南スーダンにおける税関行政の改善を支援していきます。

ジェンダーに基づく暴力(GBV)

今週は、JICAジェンダー専門家 池内千草様 からの投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年11月11日投稿)

南スーダンにてジェンダーに基づく暴力(GBV)被害のサバイバーに寄り添いながら
—NGOとガイドラインを作成—

こんにちは。JICA南スーダン「ジェンダーに基づいた暴力（Gender-based Violence）の被害女性の自立と社会復帰事業」のアドバイザーの池内千草です。

日本では、約10人に1人の女性がこれまで配偶者から様々な暴力を受けたことがあり、配偶者間における暴力の被害者は90%以上が女性である事をご存知ですか？このような女性に対する様々な暴力は、ジェンダーに基づいた暴力（Gender-based Violence）と呼ばれ、「社会的性（ジェンダー）に基づく身体的、精神的、経済的、性的暴力」を意味していま

す。

南スーダンにおけるGBVの問題は、社会に根強くある家父長制をベースとした女性の価値の低さに加え、混乱に乗じて子どもや女性が性的な攻撃の対象となる事案などもあり、人々の生活に根深く存在しています。また、主要な問題の一つとして捉えられているものに児童婚がありますが、18歳になるまでの間に52%の女の子が結婚するというデータもあります。そして、南スーダンの児童婚の蔓延には「ダウリー＝婚資（花婿やその家族が花嫁の親族に贈る財産）」の伝統が大きく影響しているとされています。児童婚をさせられる女の子たちは、結婚のために学校を退学させられることが多いですが、十分な教育を受けていないために雇用の機会も少なく、一人で婚資を返せるだけのお金を稼ぎ、強制的な結婚から自由になるのは容易ではありません。こうした被害を受けている女性は、私が日々





仕事を一緒にする南スーダン政府職員の中にも、一定数以上存在しており、広く社会に蔓延する問題であると日々実感しています。

現在JICAでは、南スーダンでは初めての試みとして、南スーダン政府と共にGBVサバイバーの自立と社会復帰のロードマップとなるガイドラインの策定をめざしています。具体的には、政府職員などがGBVへの理解や対応能力を高めるための研修を支援するとともに、被害女性やリスクの高い女性の経済的な自立に向けて、NGOや民間、市民団体と共にパイロット活動を実施しています。これまでに女性たちが直面する問題と支援サービスのギャップを分析し、どのような支援が有効なのかを仮説をたてて考えてきました。例えば、現在南スーダンで支援団体が行う職業訓練は縫製や美容師

研修等、同じような分野に偏っています。また多くの女性が、特に研修を受ける機会のないまま、比較的簡単に始めることができる路上での食品販売などに従事しています。そのため、新しい分野での職業訓練の提供や、女性たちへのビジネス研修の実施を計画し、女性たちがより高く安定した収入を手にすることができるよう工夫に取り組んでいます。また、GBVサバイバーが活動に参加しながらも、被害のトラウマから回復できるよう心理社会的支援が受けられる体制整備にも取り組んでいます。これらのパイロット活動を6～9か月の期間実施した後、活動から得た知見や教訓をガイドラインとしてまとめ、これらの知見を国内の広い関係者に共有し、GBVサバイバーの自立と社会復帰のための更なる行動の後押しとしていきたいと思っています。

廃棄物管理支援

今週は、JICA南スーダン事務所 企画調査員 千葉真梨子様からの投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年11月18日投稿)

こんにちは！JICA南スーダン事務所で廃棄物管理を担当しています千葉真梨子です。今回は南スーダンの首都ジュバでゴミ問題に取り組むJICAの活動を紹介させていただきます。

日本では毎週住民はゴミを決められた曜日・場所に出す、それを行政が手配するゴミ収集車が収集するのが当たり前ですが、世界で一番新しい国・南スーダンにいとそれは当たり前ではないことを実感します。

ジュバ市はスーダン統治時代の2005年には約16万人の小さな街でしたが、2011年の南スーダン独立に伴う国内外からの帰還民の流入等により同市の人口は2021年には40万人（JICA調べ）と急激に増加、発生するゴミ量も急増しました。しかし、独立間もないこの

国には大量のゴミを回収・処理するという概念が当時なく、市民は路上や川、空き地にゴミをポイ捨てするのが当たり前、結果ジュバ市内にはゴミが散乱し、保健、衛生上の課題でした。特に課題だったのが、清掃サービスを提供する行政職員・技術者の能力不足、そして政府と住民の「公共サービス」という概念の欠如でした。ゴミ処理問題を扱う廃棄物管理は行政と住民が協力して成り立つ協働事業ですが、長らく続いた紛争が原因で行政も住民も公共サービスを提供・享受した経験がほぼなかったのです。

そこでJICAはジュバ市で公共サービスとしての廃棄物管理体制の基礎を構築するため技術協力「ジュバ廃棄物管理能力強化プロジェクト」（2011-2014）および「ジュバ市きれいな街プロジェクト」（2022～）を実施、並行して無償資金協力事業「ジュバ市廃棄物管理計画」によりゴミ収集車両やゴミ処理用機材を供与する予定です。





独立後の2013年、2016年に発生した南スーダン国内での紛争によりプロジェクトは一時的に中断されましたが、プロジェクトを通じてジュバ市役所に廃棄物管理を担当する環境衛生局が設置され、さらに行政職員への技術移転や居住区でのパイロット活動等を通じて、行政および市民が「公共サービス」であるごみ処理サービスを理解するようになったことは大きな一歩と言えます。今ではジュバ市民が行政に最も解決を期待しているのがごみ問題と言われるまでになりました。

とは言えジュバ市のごみ問題の課題は山積みです。公共サービスにより生活環境が改善することで人々は国の平和と安定を実感するのだと思います。世界で最も新しい国・南スーダンでは日本では当然の公共サービスが非常に脆弱ですので、制度や組織、人材を一から作り上げていく必要があります。ジュバ市役所や関係機関も限られた予算、機材や人材の中で、試行錯誤しながらも市民の期待に必死に応えようと様々な試みを行っています。

市民と協力しながら信頼される公共サービスを構築して行くには時間と忍耐を要しますが、JICAはジュバ市役所や関係機関の取り組みを支援し、共に「きれいな街、ジュバ」を目指して参ります！



選挙支援

今週は、JICA南スーダン事務所企画調査員の吉田祐樹様からの投稿です。是非、お楽しみください。

以下に紹介されている研修の様子は、NHKニュースでも取り上げられました。

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/mito/20221212/1070019427.html>

(2022年12月16日投稿)

南スーダンにおける初の総選挙実施を目指して

～南スーダン選挙管理委員会ら向け本邦研修の実施～

こんにちは！JICA南スーダン事務所企画調査員の吉田祐樹です。

JICAは、12月1日～16日にかけて、南スーダン選挙管理委員会及び現地メディア関係者ら12名を日本へ招待し、選挙管理実務者や専門家による講義や、実際の主権者教育現場や投開票会場への訪問を通して、2024年末に予定されている南スーダン独立後初の総選挙に向けての取組に大いに役立ててもらおうべく、研修を実施しました。今回はその一端をご紹介します。

研修前半は、日本の様々な選挙管理実務者や専門家などから講義を受けました。講師の方々は大学研究員、元国連職員、都内自治体

の選挙管理委員会職員、主権者教育の普及に取り組むお笑い芸人など、本当に錚々たるメンバーでした。取り上げられたトピックについても選挙制度、関連法律、ジェンダーの配慮、有権者登録、開票作業の手順、集計方法、主権者教育等々、非常に多岐に渡りました。私も後方から南スーダン研修員の様子をみていて、長旅や時差、慣れない環境等による疲労で集中力が低下してしまうのではないかとヒヤヒヤしていたのですが、12名全員が非常に熱心に参加しており、質疑応答でも質問が絶えることがなく、いくつかのセッションは予定時間をオーバーして続けられました。良い意味で予想を裏切られ良かったです。(笑) 講義で基礎知識を付けた後は、参加者も渡航





前から楽しみにしていた選挙現場の見学を行いました。まずは、前橋市の公立小学校にて実施された、同市選挙管理委員会主催の模擬選挙授業を見学しました。投票会場さながらにセッティングされた体育館にて、候補者に扮した地域のボランティアの方々による選挙演説を聞いた後、生徒が受付、投票、開票、当選者発表といったプロセスを体験する一連の流れを見ることができました。研修員の代表は、「選挙は武器ではなく、投票を通して力を手に入れる民主的な手法であり、日本はその模範の国の1つだ」と感嘆していました。

次に、茨城県つくば市にて同県県議会議員選挙の投開票の様子を見学しました。市役所にて同市選挙管理委員長から同選挙の概要について説明を受けた後、同市役所内の投票所を見学し、整然かつ円滑に投票が行われている状況に、研修員はお互い目を見合わせて感心していました。その後開票会場に移動し、各投票会場から投票箱が続々と運び込まれる様子、委員長の開票開始宣言を受けて市役所職員が一斉に手作業、また特殊な機械を使って集計する様子などを見て、「なんと効率的かつ効果的な集計方法なんだ！」と驚きを隠せない様子でした。研修期間中に実際の選挙を見学できたことは、日本の選挙実務のイメージを高めてもらう観点からも本当にラッキーで、本研修

一番のハイライトになったと思っています。

その他にも選挙報道におけるメディアの役割ということで、NHKインターナショナルを訪問し、選挙とメディアの関係性や選挙特番の制作現場などについても学びました。本研修は内容的に本当に盛り沢山でしたので、まずは南スーダン研修員には学んだ内容を整理してもらい、日本での経験を現地の活動にどのように活かしていけるかについては、JICAとしてもこれから選挙管理委員会とよく協議し、効果的な選挙管理協力事業を共に展開し、自由で公正な選挙実施に貢献していければと考えています。



南スーダン支援への想い

今週は、JICA南スーダン事務所の山中祥史様によるご投稿です。

是非、お楽しみください。

(2022年10月7日投稿)

悠久の水を湛えるナイル川に、フリーダムブリッジが大きく青い弧を描く。

川沿いの大きな緑のマンゴーツリー。砂埃を上げる赤い土。

苦節10年を経て完成した橋に、黒い肌の群衆がひしめきあう。

頭上に輝く太陽の下、彼らの目も様々に輝いているのは、気のせいではないかもしれない。ああ、これが南スーダンか。この瞬間が、この国のあるべき姿なのかもしれない。新たな自由を求めて独立した際にも、こんな風に期待や夢に目を輝かせていたのだろうか。

青・緑・赤・黒・星、国旗の5色に彩られた光景を目の前に、そんな気持ちが、灼熱の熱気を吸い込んだ胸の内をよぎる。

2度の紛争により、この国が失ったものは何だ

ろうか。期待に満ちた国造りの道、豊かで活気のある暮らし、安心できる生活、多くのものが遠のいた。独立から10年、期待からの失望、失望からの期待を、この国の人々は幾度となく経験してきたのだろう。

2018年に和平合意が署名されてから、少なからずジュバでは平和は保たれている。国を率いるリーダー達も、お互いに平和を守っていきましょうという意思を示している。新聞・ニュースでは、和平プロセスが、一進一退しながらも少しずつ進んでいる様子が、日々報じられるようになってきた。誰もが平和を望み、今度こそ、紛争が起こることがないことを願っているに違いない。しかし、果たして、今回もその期待が裏切られることがないと、どれほど信じていることができるのであろうか。今の南スーダンに必要なのは、何かが確かに変わり、生活が確かに好転し、確かに平和になっているのだという、「実感」なのかもしれない。そう思う。





今までなかったところに橋が架かったことへの新鮮な驚き。新たな道のつながりにより何が起きるのかもしれないという期待。平和の恩恵が確かにもたらされたという実感が、フリーダムブリッジに集まった人々の目に、確かな輝きを与えてくれていたらよいな、と思う。

JICA広報誌10月号のテーマは「平和構築」である。

南スーダンに対するJICAの取り組みを、3つの視点で紹介してみた。

世界各国でのJICAの平和構築の取り組みも合わせ、是非、ご一読ください（リンクは末尾）。

キーワードは、「強靱な国・社会づくり」、「信頼の醸成」、「人道・開発・平和のネクサスの推進」。

つまりは、南スーダンにおいては、

① この国を平和にしていこうとする人たちを応援すること、

② 国や人々の生活を潤わす経済が回るよう

にすること、

③ 誰もが安心して暮らせるための社会を実現させること、

これらを同時に全部やり、だれもが信頼関係で結ばれた、当たり前前の国にしていく、ということである。

きっと時間もかかるし、難しい。

けれど、南スーダンは、確かに前に進んでいる。そう願いたい。

https://jicamagazine.jica.go.jp/article/?id=202210_3f...



日本のPKO活動

今週は、国連南スーダンミッション（UNMISS）・ミッション支援部施設課施設幕僚3等陸佐有蘭 光代さんによるご投稿です。

是非、お楽しみください。

（2022年9月2日投稿）

ミッション支援部施設課 施設幕僚 3等陸佐
有蘭 光代

UNMISSのオフィスエリアに足を踏み入ると、「信」「仁」「和」と書かれた石碑が迎えてくれます。これは、2012年から2017年までの間、日本から南スーダンに派遣されていた自衛隊の施設部隊に感謝を表するため、現ミッションサポートセンター長が、日本隊撤収後の宿営地に残されていた石を運ばせたものです。着任早々、私はこれには面食らいました。他国軍からも工兵部隊は派遣されているにも関わらず、オフィスエリア入口（玄関）に日本隊の石碑があります。任務に邁進しなければという思いと同時に、自衛隊から派遣された歴代の先輩方がそっと見守ってくれているような感覚がありました。





私は、2013年に施設部隊の広報幹部として派遣されており、地域の人々から「排水を考慮した日本隊の道路整備が、家の中まで流れ込んでいた雨水を防いで住居環境を改善した。」との声を直接聞いていました。今でもそのレガシーは残っており、施設部隊と当時仕事をしていたエンジニアの同僚からも、高い作業規律や品質管理、そして現地住民からクレームが一切入らない日本隊の仕事ぶりは工兵部隊の良いお手本だったと何度も聞かされました。日本隊の宿営地を引き継いだタイ工兵隊の友人からは、「コンテナが整然と立ち並ぶ、美しい日本の宿営地を引き継いでラッキーだった。」と言われました。そのタイ工兵隊は、日本隊から引き継いだ宿営地を自ら耕し、野菜や植物を育て、今では環境に配慮した最も緑豊かで美しい宿営地へと進化させてくれています。

私のポストも、歴代先輩が積み重ねた実績に基づき与えられた重要なポストであることがすぐにわかりました。文民職員であるエンジニアチーフのもと、14ヶ国からの合計17名の施設幕僚（軍人）を管理しつつ、バングラデシュ、インド、中国、韓国等の7ヶ国の陸軍工兵部隊を運用して、南スーダン全土の道路整備を主管するポス

トです。在任間、深刻な洪水被害や治安悪化により作業が中断するハプニングに幾度も見舞われましたが、各国工兵部隊やUNMAS（地雷対策サービス）等の尽力により、約2600Kmの道路整備を終えることが出来た時は、静かな喜びを得ました。現在、南スーダン政府は主要道路の全舗装化を目指しており、今後UNMISSの工兵部隊が担当するのは、治安情勢に課題の残る地域の道路整備にシフトしていくことが予測されます。道路は物流、治安改善、人的交流の促進等、まさに平和構築の土台であり、復興の程度を測る一つのバロメーターであることを学びました。



もう一つ、私が肌感覚で得たものを紹介させて下さい。本年3月でのUNMISSの国際女性デーにおいて、軍事部門代表パネリストとしてスピーチをする機会を得ました。私は一度目の派遣と日本における災害派遣経験から、女性隊員は地域の人々から心を開いてもらいやすいということや、男性だけでは気が付きにくいニーズの把握に役立ったことを共有させてもらったほか、指揮官職のやり甲斐や喜びを紹介させてもらいました。すると、自分が想像した以上に反響が大きく、「関心を惹きつけられ、勇気づけられた。」「男性に負けまいと無理をしていたが、自然体でいいんだと励まされた。」という声が寄せられました。文民であろうが軍人であろうが、ジェンダー、国籍、ポジションに関わらず、誰もがエンパワーメントを必要とし、互いに励まし合

うことが必要であることを改めて感じました。

最後になりますが、今回の派遣で「平和は自分の半径1mから創る」という教訓を得ました。価値観の異なる多国籍な同僚たちと協力しあいながら、時には目を背けたいくなるような課題に対して議論を重ね、職責の範囲で少しでも前に進めていくことが第一歩だと学びました。今後も学びと成長を続けながら、自衛官として務めを果たしていきたいと思います。

有蘭 光代 施設幕僚（令和3年8月29日～令和4年8月28日）



情報処理の仕事

今週は、国連南スーダンミッション（UNMIS S S）・Joint Mission Analysis Center（JMAC）情報幕僚1等陸尉 原田 寿幸さんによるご投稿です。

是非、お楽しみください。

（2022年9月9日投稿）

Joint Mission Analysis Center（JMAC）

情報幕僚 1等陸尉 原田 寿幸

私はUNMIS S SのJMACで情報幕僚として勤務している陸上自衛官の原田です。情報幕僚の任務（業務内容）は主に、情報収集のためのデータベース上にアップロードされた報告資料を確認・整理し、各種報告書内容の誤植、不整合、重複について、情報提供元に対し、助言及

び修正しています。情報はあらゆる任務・活動の元となるものであり、そのチェックは大変重要なものであり、責任が重いものであると自覚するとともに、やりがいを感じています。

また私の他にも3名の日本人司令部要員が派遣されており、公私共に連携し、充実した日々を過ごしています。

現在まで、本邦からの支援、家族の支援・理解等により、業務に邁進することができています。引き続き平和と安全の定着及び南スーダンの発展に貢献できるように、日本を代表して精進します！

原田 寿幸 情報幕僚（令和3年8月29日～令和4年8月28日）



輸送の仕事

今週は、国連南スーダンミッション（UNMISS）・ミッション支援部 航空課 1等陸尉 森 克仁（もり よしひと）さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

（2022年9月23日投稿）

今回投稿させていただく陸上自衛隊の森と申します。令和4年1月から国連南スーダン共和国ミッション（UNMISS）のミッション支援部航空課で飛行計画係として、首都ジュバにて勤務しています。本投稿では、UNMISSにおける航空課の活動についてお伝えしたいと思います。

皆さんは、南スーダンの地図をご覧になられたことがあるでしょうか。主要な道路が主要な都市を結ぶように描いてあり、各地に点在する町もおそらく道路がつながっているのだろうと想像できます。しかし、実態として首都の一部を除く道路のほとんどは舗装されておらず天候の影響を大きく受けます。南スーダンは、約6ヶ月に及ぶ雨季がありますが、平坦で広大な

土地であるために、雨季の水の逃げ道が少なく、道路は水没し凸凹になることから、車があったとしてもその移動は制限されます。

また、UNMISSは、文民保護、人道支援等様々なマンデート（任務）を実施するため、多くの部署があり、文民・軍人合わせて約1万8千人のスタッフが南スーダン国内各地に拠点を設けて活動しています。各部署は航空機を保有していませんので、航空課は、UNMISS各部署からの飛行要求に応えられるよう空路によるスタッフの拠点間移動や、食料・車・居住施設・燃料等の物資空輸の全てを担っています。

ここで、航空機運用上の懸念事項の一つを紹介します。航空機は、車と同様に定期整備が必要ですが、車と異なり数日単位の時間が必要で、長いもので数週間かかるものもあります。もちろん、航空機整備があるからといって、飛行要求が減ることはありません。全ての航空機が飛行できる日というのは稀で、1機～数機が整備に入っていることの方が日常です。





一方、航空課の任務は、安全かつ最も効率的な航空機の運用をもってUNMISSの活動を支援することです。大型の航空機が長期整備に入っている時などは、チームで知恵を出し合いながら最適な運用方法を考えていかなければなりません。

重ねてになりますが、航空機はUNMISSが活動する上で重要かつ必要不可欠な要素です。一例として整備に関する懸念事項を紹介しましたが、航空課では、どうすれば懸念事項を乗り越えて飛行要求を最大限達成できるかについて上司・同僚とともに考え、かつ航空機の安全についても配慮しています。

本投稿が、PKOにおける航空機運用について、少しでも皆さんの理解の助けになれば幸いです。

最後になりますが、私は今回のUNMISS勤務が初めての海外勤務です。着任当初は緊張や不安もありましたが、10カ国以上からなる航空課の同僚とはすぐに打ち解け、互いに助け合いながら充実した勤務を送っています。また、勤務を通じてUNMISSの活動を支えているというやりがいを感じています。引き続き南スーダンの平和と安全及び発展に寄与できるよう精進していきます。

森 克仁 航空運用幕僚（令和4年1月24日～令和5年1月予定）

南スーダン発展の努力

今週は、国連南スーダンミッション（UNMIS）・ミッション司令部 兵站（へいたん）幕僚 3等陸佐 田原 快さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

（2022年9月16日投稿）

「私はUNMISのミッション司令部で勤務している陸上自衛官の田原です。実は私にとって南スーダンでの任務は2回目となります。1回目は約10年前、まだ日本が施設部隊を派遣している時にその一員として参加していました。今回、私は久しぶりにここ南スーダンを訪れ、10年という長いようで短い時の流れの中で南スーダンがいかに発展したかを目の当たりにし、驚くばかりでした。

「男子、三日会わざれば刮目して見よ」という

言葉があります。『三国志演義』の中で、武勇のみの将であった呂蒙が孫権の一言に触発され、猛勉強をして別人のようになったという話です。南スーダンは、10年前に私が生活していた時には予想もしなかった発展を遂げ、人々は前向きに様々なことに取り組んでいます。

呂蒙が孫権の一言で変わり努力を続けたように、南スーダンにも多くの人の努力と働きがあったのだと思います。そして、その中には間違いなく私達日本人の貢献が昔も今もあり続けているのです。私はその誇りを胸にこれからも南スーダンのため、日本のため精一杯頑張ろうと思います。南スーダン、3日会わざれば刮目して見よ！」

田原 快 兵站幕僚（令和4年1月24日～令和5年1月予定）



連絡調整員の仕事

今週は、南スーダン国際平和協力隊 連絡調整要員 須田 大作（すだ だいさく）さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

（2022年9月30日投稿）

初めまして、南スーダン国際平和協力隊連絡調整要員の須田です。連絡調整要員とは、UNMISSに司令部要員として派遣されている陸上自衛官4名を、主として物品の新規購入・修理その他生活面で様々にサポートする業務です。私は、令和4年2月1日から同年7月14日までの間、連絡調整要員として、現地に滞在しておりました。

2月に初めてジュバに到着し、市内を見た印象は、海上自衛官として艦艇で訪問した二十数か国とも違う独特なものでした。そして、約半年間の勤務の中で少しずつその印象は変わっていききました。当初、現地の人々は肌の色や顔かたちが全く違う自分を睨むように見ていると思っていました。ですが、ジュバは1年を通じ

て日差しが強く、あまり帽子を被らない彼らはただ眩しいからそうしているだけであると今では思っています。日本とは異なり、外出先で油断することはできませんが、彼らの多くは基本的に温和であり真面目であることが分かってきたからです。身近なところでは勤務先の大使館の南スーダン人職員は、普段非常に温和な表情をしています。業務面でもその真摯な取り組み方や人の話を一生懸命聞く姿を毎日見ることができます。





また、日本の無償資金協力で約10年の歳月を経て完成した、ナイル川に架かるフリーダムブリッジでも、現地雇用者は一生懸命真面目に働いていたと日本人関係者から聞きました。加えて、ジュバ市内の自転車修理店の店員は、直射日光の下、汗をダラダラと流しながら、自分の自宅よりも迅速かつ丁寧に修理作業を仕上げてくれます。

南スーダンは、国家歳入の大半を原油の売却で得ています。しかし、南スーダンは原油だけでなく、銅、ダイヤモンド、金、鉄、石灰石、大理石、亜鉛といった地下資源が豊富だといわれています。また、国の約95%が農業適地であり、ナイル川や地下水といった豊富な水資源もあります。このように見えてみると、南スーダンは、人的資源、地下資源、農業資源及び水資源が豊富であり、今後飛躍的な発展が見込まれる潜在力の非常に高い国ではないかと考えられます。

現在、和平合意の元に和平プロセスが非常にゆっくりとしたペースではありますが

進行中です。国の平和が続けばこの国は、自分の見立て以上に注目すべき国になるのではないかと考えています。

須田 大作 連絡調整要員（令和4年2月2日～令和4年7月14日）



オール前橋で事業に取り組む



今週は、前橋市役所の内田健一さんのご投稿です。前橋市は、南スーダンの東京オリンピック・パラリンピック選手団のホストタウンとして、2019年から2021年まで南スーダン陸上選手団の支援をされてきました。

この度、前橋市の貴重なご経験を、4回の連載としてご共有いただけることになりました。本日は、連載の第1回目です。是非、お楽しみください。

(2022年2月4日投稿)

<第1回：南スーダンと前橋市>

前橋市役所文化スポーツ観光部スポーツ課 内田 健一

今回はこのような形で、南スーダンに関する情報発信のチャンスを前橋市にいただきありがとうございます。ご存知の方もいらっしゃると思いますが、東京2020大会に向けて南スーダン陸上選手団が当市において長期合宿を行っておりました。この1年9か月の長期合宿を通じて我々が体験したことや、南スーダンについて知ることができたことをこのページをご覧の皆様にお伝えできればと思います。どうか最後まで目を通していただけますと幸いです。

1. オール前橋で事業に取り組む

2019年11月14日（木）にジョセフ（コーチ）、アブラハム（男子1500m選手）、アクーン（男子400mハードル選手）、マイケル（パラ100m選手）、ルシア（女子100m,200m選手）の5名が日本の地を踏み、いよいよ長期合宿開始のゴングが鳴りました。長期に亘る事業のため、もちろん当課のみで全てを対応することは不可能でした。そこで多くの市民の方々にご協力をいただき支えられた1年9か月でした。

まずはトレーニング面。トレーニングのコーチとして前橋市陸上競技協会の方々、また練習中のコーチと選手団の橋渡し役として約10名の方々に通訳ボランティアとして長期に亘りご協力いただきました。1年9か月もの長期間ボランティアとしてご協力いただくことは、とてつもない労力が必要なことです。ただ皆様が常々におっしゃられていたのが、「彼らのためなら」という熱い想いでした。選手団が背負っている五輪出場というミッションが持つ意味（※詳しくは後の章で言及させていただきます）に共感いただき、ご協力いただけたことは感謝しかありません。

そして生活面。選手団は日本語と日本でのマナーや習慣を学ぶために、市内の日本語学校に平日は通いました。また彼らはクリスチャンであるため、日曜日には市内の教会で礼拝に参加させていただきました。こちらから教会に経緯を説明したところ、快く迎えていただきました。加えて、食事ではなるべくアスリートに適したタンパク質が多めの食事が摂れるように、市内のレストランにご協力いただき低価格で栄養価の高い食事を特別にご提供いただきました。よくレストランのオーナーさんともお話をさせていただきましたが、どうしたら彼らが食べやすいのか、またバランスが取れた食事が摂れるのか研究しながら料理を提供いただいていたようです。

また前橋の地で出来た友人たちも彼らを支えてくれました。当初心配だったのが選手団で唯一の女子選手だったルシアでした。シャイな性格ということもあり、来日当初は日本の生活になじめていない様子が見られました。しかしそんな状況に変化が見られ出したのが、歳の近い友人が出来てからでした。同じグランドでトレーニングをしているうちに仲良くなったようで、休日一緒にショッピングやカラオケに出かけたりしたそうです。歳が近く話しやすい友人が出来たことは彼女にとって、とても大きな助けになったことは間違いありません。

その他にも多くの市民の方々に支えられました。文字通りオール前橋で取り組めたからこそ実現できた事業であると確信しております。

本事業の詳細については当市のホームページで公開しておりますので、お時間ございましたら下記のページにアクセスしていただければと思います。

<当市ホームページ>

<https://www.city.maebashi.gunma.jp/..gyomu/1/5/18852.html>



私が見た南スーダン

今週は、前橋市役所の内田健一さんによるご投稿の第二弾です。

(2022年2月11日投稿)

<第2回：南スーダンと前橋市>

前橋市役所文化スポーツ観光部スポーツ課 内田 健一

2. 私が見た南スーダン

この事業には既にご説明させていただきましたとおり、本当に多くの方々にご協力いただきました。関わられた方全てがそれぞれ感じたことはあると思いますが、ここでは私が個人的に感じたことなどにつきましてお話をさせていただきます。

まず選手団が来日する前の勝手な私の先入観では、アフリカの国ということととにかく陽気でその明るさに圧倒される様な人たちではないかと想像しておりました。しかし実際に初めて会った時の印象は、落ち着いている人たちだなということでした。むしろ、どちらかと言うと日本人に近いような感覚でした。「百聞は一見に如かず」という言葉がありますが、まさにこの言葉通りの体験をしました。

それでも、来日して時間が経つにつれて徐々に打ち解けはじめ、いろいろなことを話すようになりました。お互いの文化や生活など、どれも私にとって新鮮で刺激的なものでした。ただその中で衝撃的な言葉もありました。この言葉は今でも私の中で一番印象に残っている言葉です。ある選手と他愛もない話をしている時に、「今はこうやって日本にいて何不自由なく生活できているが、国にまた帰らなければならないことを夜に考えると不安に襲われる」と漏らしました。

南スーダンは2011年に独立したばかりの世界で一番若い国です。独立後も内戦に苦しみ、多くの難民が発生し、1日何も食べられない日があることもよくあるということは耳にしましたが、私自身もどこかその現実をリアルとして捉えられていない部分がありました。しかしその現実をこの言葉からリアルとして感じました。

我々日本人もみな日々多くの悩みを抱えています。仕事、将来、家庭の悩みなど多岐にわたりますが、基本的に我々の悩みは最低限生きていくという保証がある上でのものが多いと思います。

人それぞれの悩みは比べるべきものではありませんが、一方で彼らが抱えている悩みは、日本では保証されている最低限生きていくという保証が保証されていないことに起因する別次元の悩みのように感じました。

選手団が帰国してから、もうかれこれ数か月が経ちましたが、ふとした時に「ちゃんと生活出来ているのかな」と思うことがあります。

おそらく彼らと出会わなければ、私自身南スーダンの現状について真剣に考えることはなかったと思います。この事業には多くの方々に関わっていただきましたが、一人でも多くの方が日本にいては感じることはできない「何か」を感じていただけたらと思います。

本事業の詳細については当市のホームページで公開しておりますので、お時間がございましたら下記のページにアクセスしていただければと思います。

<当市ホームページ>

<https://www.city.maebashi.gunma.jp/.../gyomu/1/5/18852.html>



市内の学生との交流

今週は、前橋市役所の内田健一さんによる
ご投稿の第三弾です。

(2022年2月18日投稿)

<第3回：南スーダンと前橋市>

前橋市役所文化スポーツ観光部スポーツ課 内田 健一

3. 市内の学生との交流

本事業の目的はもちろん彼らが東京2020大会へ万全の状態での出場をサポートすることですが、もう一つの大きな目的は市内の学生との交流です。南スーダンでは2011年の独立後も内戦の長期化なども影響し、内戦に疲弊している国民が多いと聞きます。実際に選手団の中にも1日1食食べることもままならない生活を送っていた者もいました。こういった生活を強いられている人がいる事実はテレビやネットで耳にしたり目にしたりすることはありますが、日本人にとってはあくまで画面の向こう側の世界であり、私を含めてあまりリアルに感じる機会はありません。そこで我々は、市内の学生にそういった現状を知っている選手団から直接話を聞き、世界が今抱えている問題に目を向

けてもらうことや国際問題に関心をもってもらうきっかけになることを期待しました。

コロナ禍ということもあり交流が制限されてしまうこともありましたが、それでも保育園から高校まで幅広く交流を行うことができました。交流内容とすると、保育園では園児とおもちゃを作り、一緒に遊びました。小学校では南スーダンの現状について選手団が自らプレゼンテーション、選手団が英語の先生として授業に参加し英語の授業を実施、音楽の授業に参加させていただき生徒と一緒に日本の伝統文化を体験するということで、琴にも挑戦しました。更には中学校の体育祭にも参加させていただきました。中学校チームと南スーダンチームのリレー対決では大いに盛り上がりました。高校では陸上部の練習にお招きいただき、日本の高校生のトレーニングを体験しました。



さまざまなカテゴリーでの交流をさせていただきましたが、特に小学校で交流会に参加させていただいた際には毎回芸能人さながらの人気者となりました。自由時間は本来であれば校庭で自由に遊ぶ時間となる予定でしたが、結果的に即席のサイン会となり、最後は收拾がつかないため、裏口からこっそりと帰るなんていうこともありました。

逆に中学、高校と年齢が上がるにつれてより落ち着いた交流会となり、小学生とであれば距離がすごく近くなるであろう場面でも少し距離があるなと感じることもありました。日本の学生がどのように変化していくのかという部分も垣間見え、個人的には新しい発見になりました。

今回選手団と関わることが出来た学生たちにどのような影響を与えられたのか可視化して表すことは難しいですが、それでもこれからの学びの過程で何かのきっかけとなってもらえると幸いです。

本事業の詳細については当市のホームページで公開しておりますので、お時間ございましたら下記のページにアクセスしていただければと思います。

<当市ホームページ>

[https://www.city.maebashi.gunma.jp/..
gyomu/1/5/18852.html](https://www.city.maebashi.gunma.jp/..gyomu/1/5/18852.html)



東京五輪出場とその意味



今週は、前橋市役所の内田健一さんによる最後のご投稿です。是非お楽しみください。

(2022年2月25日投稿)

<第4回：南スーダンと前橋市>

前橋市役所文化スポーツ観光部スポーツ課 内田 健一

4. 東京五輪出場とその意味

結果から申しますと東京2020大会へはアブラハムが男子1500mへ、ルシアが女子200mへ出場し2人とも予選敗退。そして様々な理由により、アクーンとマイケルの大会出場は叶いませんでした。

この事業を進めている際にも「国が長きに亘る内戦で大変な状況にある中で南スーダンの東京五輪出場を支援することに意味はあるのか」といった声をよく耳にしました。

これは私自身の解釈にはなってしまいますが、五輪への出場に向けてのサポートは南スーダンにとって間違いなく大きな意味があったと考えております。なぜなら、五輪出場によって南スーダン人としてのアイデンティティーを感じることが出来るからです。

内戦が長期化した大きな原因の1つが民族対立と言われています。本来であればお互い助け合うべきはずの国民が、異なる民族であるという理由でいがみ合っているのです。感情的なものが絡み合うため、この問題を解決することは困難を極めます。

しかし、スポーツにはこのような問題を解決

することが出来る可能性を秘めていると思います。では具体的にどういうことか。少し話は脱線してしまいましたが、例えば4年に1度行われるサッカーワールドカップで日本は熱狂の渦と化します。サッカー日本代表選手は出身地や所属チームはバラバラであります。日本国民全員が一丸となって応援します。これは我々が日本人としてのアイデンティティーを持っているからではないでしょうか。

選手がどこの民族出身ということではなく、国の代表として五輪に出場し、それを見た南スーダン人が民族という垣根を越えて国としてのアイデンティティーや誇りを感じる。この感覚が得られることこそスポーツが秘めている可能性ではないかと感じております。

もちろんこれだけで民族問題が全て解決出来るとは思いませんが、彼らの東京五輪出場は少なくとも解決に向けた大きな一歩になると確信しております。

そこでなぜ当市が国づくりの手助けの役目を務めたのか。さまざまなご縁で南スーダン選手団受入れのお話をいただいた際に、裸足で整備されていないグラウンドを走る選手の写真を目にしました。日本は戦後多くの国のさまざまな支援により再建しました。これらの支援がなければ今の日本そして前橋はありません。そして今度は我々がその役目を務める番ではないかという使命感が自然と生まれました。そこで当初お話をいただいた東京2020大会直前合宿ではな

く、せっかくなら1年前からの長期合宿はどうでしょうかと当市から提案をさせていただきました。一地方自治体ですので、やれることは限られてしまいましたが、それでも少しでもこの事業が南スーダンという国づくりの助けとなることを願っております。

5. 南スーダンとの今後について

選手団はコロナ禍による影響もあり想定よりも約1年長くなった当市での滞在を終え、2021年8月26日（木）に帰国の途につきました。ただ当市としては、この事業を通じて出来た南スーダンとの絆を一過性の物とせず、今後もスポーツを通じた交流を行っていく予定です。

具体的には令和4年度から令和6年度まで、毎年2人のスポーツ選手を半年間受入れる方向で調整を進めております。当市はそこまで大きくはない地方都市でございますが、今後も何かしらの形で南スーダンへ貢献させていただけますと幸いです。

6. 最後に

まずはこの長期に亘る事業実施にあたりまして、選手団の来日前から本当に多くの

課題や問題が山積しておりました。これらの課題や問題をクリア出来たのは、在南スーダン日本国大使館様とJICA南スーダン事務所様の現地からの多大なるサポートをいただけたおかげです。この場をお借りして感謝申し上げます。

また聞くとことによりますと、当市での長期合宿については安倍元首相とイッガ副大統領が会談された際や、菅前首相とレベッカ副大統領が会談された際に言及されたそうです。今後も日本と南スーダンという国同士の関係を築く外交レベルでも、例えば会談前のつかみとして言及していただくなど何かしらの形でお役に立てますと幸いです。

本事業の詳細については当市のホームページで公開しておりますので、お時間ございましたら下記のページにアクセスしていただければと思います。

<当市ホームページ>

<https://www.city.maebashi.gunma.jp/..../gyomu/1/5/18852.html>



給水衛生支援

今週は、ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）山本めぐみさんからです。是非お楽しみください。

（2022年3月11日投稿）

ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）は、現在、首都ジュバの位置する中央エクアトリア州で給水衛生支援を実施しています。

南スーダン共和国では、これまでの内戦などの影響もあり、安全な水や衛生的な生活環境を保つためのトイレなどが不足している状況にありましたが、2020年より世界的に大流行した新型コロナウイルス感染症の感染予防対策のためにも、手洗い場や安全な水、衛生的なトイレなどの支援の必要性はますます高まっています。特に、多くの方がたが密集して生活している国内避難民キャンプや医療施設などでは、感染が急速に広がるリスクはより高くなるため、感染予防はとても重要です。

裨益者の方がたと同じ言語を話し、現地の生活習慣や文化などをよく理解している南スーダ

ン人スタッフは、現地の人びとの意見を取り入れながら、より望ましい支援を行っていくためには不可欠な心強いチームメンバーです。

普段は、メールのやり取りやオンラインでのミーティングなどを通じて、事業の進捗状況を確認し、業務指示を行ったりします。



予想外の大雨などの影響で緊急の対応が必要な時には、常に事業地を訪問している南スーダン人スタッフが迅速に詳細を報告してくれるため、速やかに必要な支援を実施することも可能となっています。また、スタッフがこまめに送ってきてくれる事業地での写真や動画を通じて、裨益者の方がたの喜んでいる様子や笑顔、PWJが企画している研修に真剣な顔つきで参加されている姿などを見ると、まるで自分もその場にいるような気持ちにもなり、より一層、現地に即した必要な支援を届けたいと、身の引き締まる思いがします。

これからも、現地の人びとと協力しながら、チーム一同、南スーダンでの支援活動を継続していきたいと思っています。

〈PWJホームページ〉

<https://peace-winds.org/>

〈南スーダンでの活動〉

[https://peace-](https://peace-winds.org/activity/area/s_sudan)

[winds.org/activity/area/s_sudan](https://peace-winds.org/activity/area/s_sudan)

写真@ピースウィンズ・ジャパン (PWJ)



コロナ感染予防支援

今週は、南スーダンで事業を行うNGO、ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）の山元めぐみさんからです。是非お楽しみください。

（2022年3月18日投稿）

ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）は、南スーダン国内でのこれまでの給水衛生支援の経験を活かしながら、首都ジュバの位置する中央エクアトリア州や東エクアトリア州において、給水施設の整備や手洗い場の設置、衛生的な生活環境を保つためのトイレ建設、医療施設への石鹸や消毒液、感染予防啓発ポスター、マスク、手袋、医療用ガウンなどの感染予防関連備品の配付など、新型コロナウイルス感染症の感染予防のための活動を実施しています。また、国内避難民キャンプや人が多く集まる市場などにおいては、正しい手洗い方法など、コロナ感染を予防するための情報提供を行う啓発活動も行っています。

コロナ感染予防対策の一つとして挙げられている「マスク着用」に関しては、普段から、風邪や花粉症対策、喉の乾燥を防ぐためなどの目

的で、マスクをすることも珍しくない日本では広く受け入れているように思いますが、南スーダン人の中には、「コロナは存在しない」、「マスクをしている人は病気だからであって、元気な人はマスクはしない」という考え方の人ももいて、マスク着用ということ自体が、必ずしも簡単に受け入れられるものではないことに気づかされます。仮に、自分自身ではマスク着用の重要性を認識していても、自分の隣人や村の人から「病人だ」と思われてしまうことを





気にして、マスクをしないで過ごす人もいます。そういった状況の中で、マスク着用、ソーシャルディスタンス、手洗い励行などの重要性を理解してもらうのは、なかなか大変なことでもあります。文字が読めない人でも理解できるよう、イラストが多いポスターを使ったり、避難民や住民の人びとに感染予防知識に関する研修を行って、研修を受けた人びとが他の人びとに感染予防について教えたり、避難民キャンプでは各世帯を訪問して伝えるなど、継続的に啓発活動を行うことで少しずつ理解を深めてもらい、少しでも地元の人びとが健康な生活を維持できるよう、日々努力しています。

今日は、南スーダン人スタッフが既存の曲に歌詞をつけた、コロナ感染予防の歌をご紹介します。（南スーダン人の挨拶方法

として一般的である）握手を避けよう、ソーシャルディスタンスを保とう、コロナ感染予防には、手洗いが一番だ！という歌詞に合わせて、避難民の人びとからなる啓発活動チームが歌に合わせて踊っています。

ぜひ、一緒に踊って、皆さんもコロナ感染予防に努めてください！

〈PWJホームページ〉

<https://peace-winds.org/>

〈南スーダンでの活動〉

https://peace-winds.org/activity/area/s_sudan

「南部スーダン」時代の活動

今週は、南スーダンで事業を行うNGO、ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）の山元めぐみさんからです。是非お楽しみください。

（2022年3月18日投稿）

過去2回の記事では、ピースウィンズ・ジャパン（PWJ）が南スーダン共和国で実施している最近の活動についてお伝えしてきました。今回は、2011年7月にスーダン共和国から独立した南スーダン共和国が「南部スーダン」と呼ばれていた独立前、2006年に事業を開始した当時の様子をご紹介します。

PWJは、20年以上続いた内戦の終結を受け、周辺国や国内の別の地域に避難していた多くの人びとが帰還してきた地域の一つであるジョングレイ州で事業を開始しました。避難先から戻ってきても、水がないと生活続けることは困難です。人びとは、ナイル川の水で洗濯や水浴び、飲料水、調理用水などの全てをまかなっており、濁った不衛生な水のために、下痢などにも悩まされることも多くありました。そこで、きれいで安全な水を提供するために井戸の建設を行い、完成した井戸の維持管理を地元住民自身が継続して行っていけるよう、井戸の基本的



な修復方法や正しい管理方法などを学ぶトレーニングを実施しました。また、衛生的な生活環境づくりに向けて、公共施設にトイレを建設し、正しいトイレの使い方や井戸から汲んできた水の衛生的な保管方法などを伝える衛生啓発活動も行いました。



当時は、生活するための住居やホテルなどの施設も不十分だったため、PWJスタッフはテントでできたホテルに宿泊していました。また、ジョングレイ州独特の非常に崩れやすい地質＝黒綿土（ブラックコットンソイル）のために、井戸掘削の際には一度掘った穴が途中で崩れてしまい、やり直さざるを得なかったり、雨の日の移動の際には車が道路のぬかるみにはまってしまうなど、多くの困難にも直面しましたが、地元の人びとの協力のおかげで、これまで事業を実施してこられました。

現在は、ジュバの位置する中央エクアトリア州やその周辺地域で主に給水衛生支援を行っていますが、これからも南スーダンの人びとが少しでも安心して生活できるような環境づくりに携わっていただと思っています。

〈PWJホームページ〉

<https://peace-winds.org/>

〈南スーダンでの活動〉

https://peace-winds.org/activity/area/s_sudan





南スーダンの蜂蜜

今週は、5タレント・水野行生さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年7月29日投稿)

南スーダンの蜂蜜との出会い

水野行生

2015年のこと、私は横浜で持たれた国際フェスタに出店し、マラウイやケニアの蜂蜜を売っていました。ある紳士が店頭で「南スーダンの蜂蜜に興味がありますか？」と声をかけてられました。その紳士が当時の在南スーダン大使の紀谷昌彦氏でした。

「はい、興味があります」とすぐ答えたと思います。それから南スーダンのNGOとの取引が始まり、内戦下でその働きを受け継いだ会社と取引することになり、現在まで南スーダンの蜂蜜を日本で販売しています。

南スーダン産蜂蜜は他の蜂蜜とどのように違うか？

最初にNGOから送られてきたサンプルは、南スーダンのサバンナアカシアの蜂蜜でした。これを食べての感想は、「こってり濃厚なのに、後口は意外にあっさりして、コーヒーなどに合うなあ」というものでした。日本にはこのような味の蜂蜜はないので、お客様に支持されるのに時間がかかるかとも思いましたが、独特の風味は他の蜂蜜と差別化ができると思い、販売を開始することにしました。

2019年南スーダン訪問

2017年、マルシェなどで南スーダンの蜂蜜の販売を開始しました。それほど多く売れないと思っていたのですが、売ってみると、試食したお客様が、何個も購入してくださることがあり、この蜂蜜の日本市場での可能性を感じました。南スーダン産の蜂蜜の種類を増やしたいと思い、南スーダン訪問をことあるごとに関係者をお願いしました。





なかなか実現しませんでしたでしたが、2019年に南スーダンのジュバを訪問することができました。その時の商談でヤンピオ産の蜂蜜に出会いました。この蜂蜜が南スーダン蜂蜜の認知度を高めてくれました。蜂蜜以外にも、この時出会った商材の中には今後南スーダンの発展につながるだろうなと思うものもありました。なかなか難しいと思いますが、また、南スーダンを訪問できたらと願っています。マルシェからマルイに
南スーダン産蜂蜜の販売を始めた頃は朝

市やマルシェが中心でした。その後店舗を持ちましたが、今年テナントのお誘いがあり、6月から、横浜市の戸塚駅前にあるショッピングモール戸塚モディ(丸井戸塚店)の1階で常設店舗として営業を始めました。周りはスターバックスや文明堂、伊藤園などの有名店です。そのフロアで南スーダンの蜂蜜を販売しています。少しずつですが、お客様に認知されているように思います。これからも、地道に販売していきたいと願っております。

和平プロセスへの女性参加促進



今週は、国連南スーダンミッション・ジェンダーセクション・チーフの西谷佳純さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年8月26日投稿)

国連南スーダンミッションは、国連安保理決議に基づき、文民保護、和平合意の実施支援、人権の監視・調査、人道援助の支援、そして、和平合意上の移行期の最後に行われる予定の選挙支援が主な目的だ。隣国コンゴ民主共和国のミッションと並び、国連としては大規模なミッションで、国連加盟国の軍・警察、及び、文民職員計約19,000名が、本部と10か所のフィールド事務所に展開している。私は、「女性・平和・安全保障」政策の責任者で、17名の職員とともに、同政策の推進、及び、戦略的なイニシアティブを全ミッション体制で遂行すべく、ミッション幹部や各セクションに働きかけてき

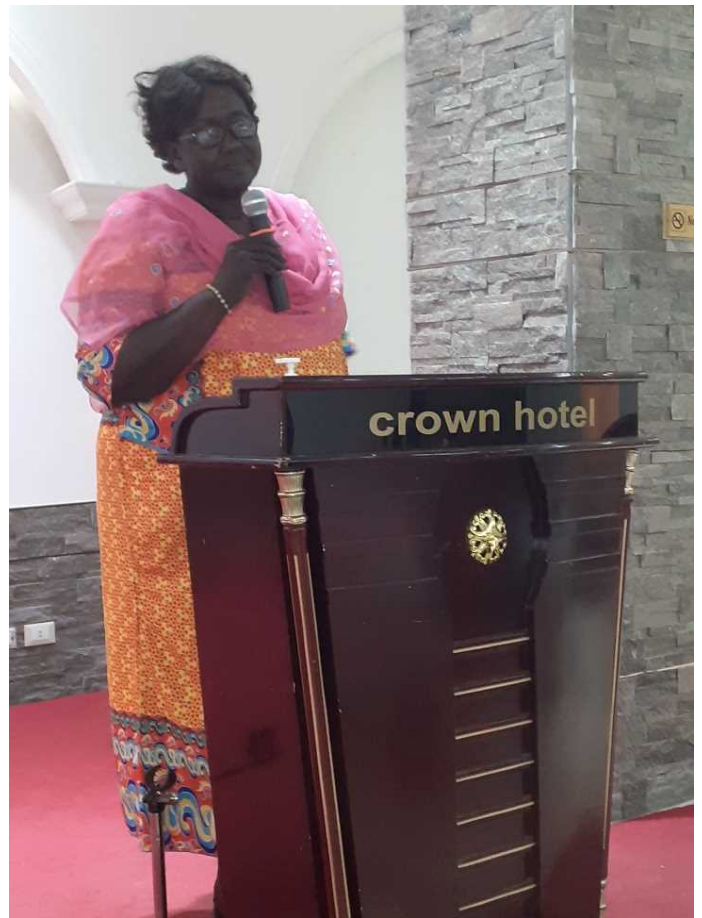
た。

また、対外的には、女性の参加や意見の反映を促進するような和平プロセスの支援、関係者の能力構築、国連加盟国との協調、また、国連ウーマンを始めとする人道・開発を行う国連機関との連携・協力を強化してきた。

現在、任国では、東アフリカ地域の「政府間開発機構」の調停によって再活性化された和平合意が、多少の遅延を見ながらも実施されている。この和平合意にいたるプロセスには、市民社会の代表らも関与しており、中でも女性市民団体は、和平プロセスの最初から、強い結束を見せ、すべての意思決定メカニズムや機構に少なくとも35%まで女性を含めるように、というメッセージを貫き通し、その努力の甲斐あって、上記のメッセージを含んだ和平合意が、最終的には調印され、女性市民団体代表も調印者として名を連ねている。

国連ウーマンは、女性の参加と、和平合意の持続には、正の相関関係がある、と報告している。和平合意が、二年以上持続する確率は、女性の参加によって、20%増加する。また、和平合意が、十五年以上持続する確率は、女性の参加によって、35%増加する。そのような観点から見ると、南スーダンでは、調印までの和平プロセス・実施と一貫して、女性が活発に参加していて、大変良いモデルだ、と言えよう。また、和平合意後も、副大統領、再編された内閣の閣僚、知事・地方政府、国会における主たるポストに、女性が任命された。全体としては、合意上の35%には、満たなかったものの、かなり近くまで肉薄した。任国の指導者達によるコミットメントと女性市民団体の結束がある場合には、ここまでできるのだ、という「南スーダンの底力」を見せつけた。

これから選挙の準備・実施まで、しばらく続く和平合意の移行期では、和平プロセス自体への支援はもとより、紛争やコミュニティの対立による苦しみから立ち上がろうとする女性、若者、子供たちを中心に据えた文民保護、ガバナンス・正義、人道支援・開発協力が必要とされる。また、女性が、平等な市民権・参政権を享受するためには、平和で安全な環境が求められる。何にもまして、選挙までの過渡期のガバナンスでは、女性や社会的に脆弱グループが、平等に参加できる機会、また、守られるような制度と能力が必要だと感じる。女性は、身の丈から、家族・コミュニティ・社会における復興のニーズを語る事ができる。そんな理由からも、女性リーダーがその力を発揮できる機会が多くある。



当ミッションにおける業務の中で、私達ジェンダーオフィサーがこれまで注力してきたのは、和平プロセスへの女性の参加促進、ことに、国連安保理決議1325をミッションマンデートの範囲で実施することである。ジェンダー主流化活動以外の事例としては、女性の市民社会・政治参加の拡大のため、女性市民団体やそのアドボカシーのための場や機会の提供、和平合意で設置された機構に任命された女性リーダーの活躍の支援、さらに、平和で安全な環境を創出するために動き出した治安部門における女性ネットワーク設置と支援である。

こうした機会を捉えて、女性市民団体は、資格要件を満たし、指導者としての準備のある女性のリストを作成し、意思決定者たちに働きかけたり、メディアを通じ、「少なくとも35%は、女性の席」というメッセージを拡散したり、憲法改正や選挙プロセスで、どうしたらこの公約が遵守されるのか、知恵を出したり、様々な戦略を練ってきた。さらに、女性NGOsとともに、議員となった女性達からの要請で、国会での

議事進行、法案審議におけるジェンダー平等主流化や女性の意見を取り入れる手法を伝授するワークショップを行い、紛争被害にあった女性の力づけのためにたゆみない努力を続ける女性リーダーの皆さんを今まさに支援しているところである。

西谷佳純（にしがやかすみ）

ジェンダーセクションのチーフ。国連南スーダンミッション勤務となり、首都ジュバの国連ミッション本部に着任してから、早八年目となる。

Women parliamentarians aspire to lead the way in transforming South Sudan after years of conflict | UNMISS (unmissions.org)

Women's leadership forum sees spirited participation, underscores importance of their participation in peacebuilding and politics | UNMISS (unmissions.org)
<https://audioboom.com/.../7945966-stakeholders-call-for...>



女性の収入向上支援



今週は、UN Womenご勤務の会田有紀さんによるご投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年7月22日投稿)

UN Women（国連女性機関）の会田有紀です。UN Womenは、ジェンダー平等と女性のエンパワーメントのための機関です。先日、日本から南スーダンに移動したときの出来事です。国際便が到着する空港の到着口は、いつも多くの人で混み合っています。入国手続きを終え、ようやく駐車場に移動した後、スマートフォンを失くしたことに気が付きました。最後に使ったのは、空港内でした。周りにいた現地の人たちに、携帯電話を失くしたことを伝えたところ、空港で失くしたのであれば、誰かが警備員に届けているはずだから、空港に戻って報告したほうがいい、と強く勧められました。正直、スマートフォンはもう見つからない、と思いまし

たが、空港に戻り、警備員のところに行きました。すると、ちょうど携帯電話の持ち主である私を探しているところでした。空港で働いている人が、私の携帯電話を拾って届けてくれたのです。

とても有難く、うれしかったと同時に、自分の不注意と見つからないと決めつけていたことにとっても恥ずかしくなりました。後日、南スーダン人の同僚にこの話をすると、驚く様子もなく、他人の物は持ち主に返すよう、子どもの頃に母親に教えられたものだ、と言われました。

UN Womenは、日本政府から資金を受け、南スーダンの国内避難民の女性たちの収入向上支援を行っています。写真は、国内避難民のレジーナさん（30歳）です。日本の支援でピーナッツを販売するビジネスを始めました。収入を増やし、二人のお子さんを学校に通わせることがレジーナさんの夢です。

国内避難民（IDP）と水衛生支援

今週は、真嶋五月さんによるご投稿です。
是非、お楽しみください。

(2022年8月5日投稿)

国際移住機関（IOM）南スーダン事務所の真嶋五月です。

IOMは、南スーダンにおいて、再生可能エネルギーの取り組みを実施しています。取り組みの例として、今回は、私が所属する水・衛生

（WASH）部署での取り組みを二つ紹介します。

一つは、南スーダン北部にあるベンティウIDP（Internally displaced people, 国内避難民）キャンプ、ナイバシャIDPキャンプおよびマラカルPoC（UN Protection of Civilians 文民保護）キャンプにおける太陽光発電による給水です。

IOMは、これらのキャンプで生活する103714人の国内避難民に安全な水を供給しています。管理する全ての給水施設に太陽光パネルを設置し、より地球環境に配慮した支援を目指しています。



ナイバシャIDP キャンプでは、乾季には、発電機を一切使用していません。また、雨季や天候が悪い日には、太陽光が十分得られないこともあるため、ディーゼル発電機による給水に切り替えられるように設備を整えています。

このように、太陽光発電とディーゼル発電機による水供給により、全てのキャンプにおいて、エンジンオイル使用量や二酸化炭素の排出の大幅な削減を達成しつつ、途切れのない支援活動を実施しています。



もう一つは、マラカルPoCキャンプ内の公共トイレから出る排泄物をエネルギーに変えるバイオガス生成の取り組みです。これはパイロット事業として、データ収集・検証分析を進めながら、同キャンプ内一部の地区住民180人を対象に行っています。このキャンプでは、バイオガスプラント1基が稼働し、排泄物を発酵させ、バイオガスを生成しています。このバイオガスは、キャンプ内にある公共の台所のガスコンロにて調理用ガスとして毎日使用することができ、1日当たり16世帯が利用しています。バイオガスの利用により、森林伐採の減少や薪を燃やすことによる二酸化炭素の排出削減などの環境改善の効果だけではなく、薪の収集に費やす時間の減少などの副次的効果も期待しています。今後は、キャンプ内

外での事業の拡大、地域住民グループによる施設の維持管理が実現できるよう地域住民への研修、ビジネスプラン作りのための支援に向け準備を進めていきます。



IOMと輸送の仕事

今週は、IOM笹川さんによるご投稿です。
是非、お楽しみください。

(2022年8月13日投稿)

みなさん、こんにちは。国際移住機関（IOM）
南スーダン事務所の笹川 真です。

IOMは、国際的な人の移動（移住）の問題を専門に扱う唯一の国連機関です。

皆さんは、移住を専門に行う機関と聞いて、どのような支援活動を想像しますか？

実は、移住に関連する分野はとても広く、IOMの活動内容は、多岐にわたっています。一例を挙げると、適切な衛生習慣を普及、定着させる水と衛生（Water, Sanitation and Hygiene:

WASH)事業、一時的な避難場所を提供するシェルター（Shelter/Non-Food Items: S/NFIs）事業、避難民動向モニタリングシステム

（Displacement Tracking Matrix: DTM）を使って調査を行う事業、キャンプ調整・管理（CCCM）を行う事業などがあります。

南スーダンは、交通インフラが脆弱なため、雨季（6月～12月）に入るとジュバと地方との道路が分断されてしまいます。さらに、近年は気候変動により雨季が長くなり、支援環境は年々厳しくなっています。そのため、乾季の間に、いかに防災と災害への備えを進めることができるかが、支援の鍵となっています。





人道支援は、より効率的に行われるように、支援機関が集まるクラスター会議での調整を通じて行われています。IOM南スーダン事務所では、WASHやS/NFIsクラスターでの調整のもと、IOMだけではなく他の支援機関も含めた支援物資を一括して調達し、全国6カ所の備蓄倉庫で管理をしています。主な支援物資は、一時避難のためのシェルター資材（ターポリンシート、ロープ、竹材や木材、キッチンセット、蚊帳等）や避難民の衛生環境を整える資材や物品

（ウォータータンク、浄化タブレット、歯ブラシや石鹸などが入った衛生キット等）等です。そして、他の国連機関やNGOの要請に応じて、各地の倉庫から支援物資を放出しています。これにより、1年を通して、安定した支援活動を行える体制を確立し、国際社会全体で南スーダンを支えています。私は、輸送物資管理担当官(Logistics and Warehouse Officer)として、それら緊急支援物資の輸送と管理を担当しています。国連職員の仕事と聞くと、ニューヨークで各国のリーダーと調整を進めて、世界の平

和と安定を目指すカッコイイ姿を想像しがちですが、私の仕事はまさに現場。事務所と倉庫を往復し、書類と物品の最終確認をしたり、国連機関やNGOの調整をしたりしています。

「モノを受け取って、保管して、送る」。一見すると単純なフローですが、一筋縄では行きません。ハンドリングスタッフのストライキ、納品の遅延、トラックによる倉庫の破壊、道路の水没、輸送中のトラックの故障。南スーダンでの仕事は毎日がエキサイティングです。

ウクライナ紛争で、国際社会全体がウクライナに注目していますが、南スーダンでも多くの支援を必要としています。これからも、日本の皆様からのご支援、よろしくお願いいたします。

ICRCでの仕事



今週は、赤十字国際委員会(International Committee of the Red Cross; ICRC) 前村明佳子様からの投稿です。是非、お楽しみください。

(2022年11月25日投稿)

今年の4月、ジュバに保護部門次長として着任しました。2014年から赤十字国際委員会(International Committee of the Red Cross; ICRC)で、コートジボワール、セネガル、ブルキナファソなどの西アフリカや中東のガザやイラクで働いていました。南スーダンには、来たのも働くのも初めてです。以前は民間シンクタンクで途上国の開発協力や諸外国の制度に関する調査研究などを行っていました。次第に、もう少し長い期間一つの国で、紛争で影響を受けた人の近くで働いてみたいと思うようになり、ICRCで働き始めました。

ICRCの南スーダンでの活動は、これまで私が働いた中で一番規模が大きく、ジュバ事務所と各地方事務所を含めて、約1,100人のスタッフが様々な部門で働いています。スタッフの国籍も非常に多国籍なので(70か国以上!）、それぞれの経験や仕事、出身国の話などを聞くのは刺激になっています。私が所属する保護部門は、武力紛争やその他の暴力に巻き込まれた一般市民に対する活動を行っており、私はジュバで他

の同僚とともに、各地方事務所の活動の調整にあたっています。その他、南スーダンで特色ある事業としては、紛争で手足を失った人たちに対する義肢や人口装具などを提供する障がい者リハビリ事業があります。

南スーダンでの国内移動は車での移動が難しいため、航空機が主な移動手段になりますが、ICRCは独自に航空機を運航しています。実は、今回初めてICRCの飛行機に乗るということで、乗り物酔いしやすいため、日本から酔い止めを持ってきて備えて、いざ出張の際はかなりドキドキしていました。実際に乗ってみると、大地に広がる緑にとにかく圧倒されました。とはいえ、すぐに寝てしまったので、気が付いたら乗り物酔いすることもなく、目的地に着いていましたが…。

家から離れて、毎年新しい環境で、人道支援に携わることは、なかなか難しいと感じることもあります。そういうときは、スポーツなどで体を動かしたり、音楽を聴いたり、料理をするなどのちょっとした息抜きを組み合わせるようにしています。

任務が始まって半年近く経ちましたが、毎日が発見と学びの連続で、あっという間に過ぎていってしまうので、一日一日大事に過ごしていこうと心がけています。

医師としての仕事

今週は、日本赤十字社医療センター/ICRCの大塚尚実医師からの投稿です。是非、お楽しみください。

(2023年2月3日投稿)

東京の日本赤十字社医療センターの医師の大塚です。日本赤十字社から派遣されて赤十字国際委員会（International Committee of red Cross : ICRC）の南スーダン共和国でのミッションに3か月参加して、12月に帰国しました。業務内容は、麻酔科医として外科医とともに（主に）戦傷外科患者の手術および前後の管理にあたります。ICRCは1978年からスーダン共和国で活動を開始し、2011年の南スーダン共和国独立後も様々な分野での人道支援を継続しています。私が参加した外科ミッションも活動地を様々に変えながら継続しており、現在は首都ジュバとジョングレイ州のアコボの病院を支援しています。私自身は、初めてのミッションは2015年で、毎回2-3か月程度と短い派遣ではありますが今回が5回目の派遣となりました。過去にはジュバをはじめ様々な地で活動しましたが、今回はアコボの病院で患者の治療にあたってきました。南スーダン共和国独立後もあちこちで大規模な衝突があり、当時は私たちの



©ICRC



©ICRC



©ICRC



支援する病院にも銃創の患者が多数搬送されてきました。現在も、戦傷患者数は減少したものの、断続的に搬送が続いています。病院は衝突の多い場所からやや遠隔地にあるので、患者は受傷から数日たってから、ICRCが運航するヘリコプターや飛行機で搬送されてきます。銃弾で汚染された傷は感染を起こし、何度かに分けて傷をきれいにする手術とその間の抗生剤による治療を行います。残念ながら上肢や下肢の切断を余儀なくされる方や亡くなる方もいます。術中も術後も大きな痛みを伴うものであり、麻酔科医として患者の痛みをしっかりとることが最大の目標ですが、痛みだけではなく、時に臨床心理士やリハビリテーション

のスタッフとともに、多角的なサポートを必要とする患者もいます。治療には長い時間を要しますが、その間の患者たちとのコミュニケーションや、地元に戻っていく姿を見ること、また、国際的なスタッフたちとの交流は何にも代えがたい経験です。また、今回のミッションでは地域で発症した病気やけがに対する手術も多く、地域住民の健康にも一役買っていたと思っています。再びこの地を訪れる機会があるかどうか分かりませんが、今後も世界のどこであろうと全力を尽くして患者が治るお手伝いをしていきたいと思っています。

国旗

大使の堤尚広です。

南スーダンの国旗について紹介します。

2021年11月22日－29日開催の、第5回 Governor's Forumの結論文書の付属に国旗の意味が説明されています。要点は次のとおりです。

1. 黒は南スーダンの人々を象徴する。
2. 白い線（黒、赤、緑の間に走っている）は平和を象徴する。
3. 赤は殉教者の血を象徴する。
4. 緑は南スーダンの豊かな土地を象徴する。
5. 黄色い星は希望と明るい未来を象徴する。
6. 三角形は空の青であり、ナイル川とその支流を象徴する。その三角形は、ナイル川と支流

が南スーダンの土地を結びつけるように、他の色（黒＝人々、白＝平和、赤＝殉教者の血、緑＝土地、黄＝希望と未来）を結びつける。

<Source>

Annex 1: The 5th Governors' Forum - After Independence (22-29 November 2021)

Theme: "Roles of States and Administrative Areas in the Implementation of the Revitalised Peace Agreement for Peaceful, Stable and Prosperous South Sudan".

(2022年3月22日投稿)



南スーダンまでの飛行機

今週は、大使館広報・文化班からです。

(2022年3月4日投稿)

<南スーダンへの道> 3月4日

南スーダンという国がアフリカにあるということはわかっている、という経路で南スーダンまで行くのか、について疑問がわくと思います。

まず、直行便はありません。

次に、2022年3月現在、日本から一度の乗継だけで行ける経路は、UAEのドバイまたはエ

チオピアのアディス・アベバのみです。

どちらの経由地でも、往復共に同日発着の便はなく、往復ともそれぞれ二日を要します。

乗継回数が二回に増えると、ヨーロッパや中東、アジアの経由地が増えて選択肢は広がりますが、たどり着くまで三日を要することにもなりかねません。

6月からトルコ航空が就航するようですが、実現すればドバイ、アディス・アベバに次いでイスタンブール経由と選択肢が増えます。





Jebel Kujur 山

今週は、先月まで大使館に勤務していた青野龍朗さんからです。是非お楽しみください。

(2022年4月1日投稿)

今回はジュバ市内にある『山』についてご紹介します。

Jebel Kujurとよばれており、標高3、400m程の小さな山で、約30分程で登頂できます。

途中手を使いながら登る箇所があり、慣れてない人は少し辛いかもしれませんが、頂上からはジュバ市内が一望できます。

地元の人たちにも親しまれている山であり、ジュバでのアクティビティとしておすすめのスポットです。

ジュバにお越しの際は是非お楽しみ下さい。



地元市場とレストラン

今週は、元大使館員の永淵麻秀さんからからです。是非お楽しみください。

(2022年4月8日投稿)

こんにちは。

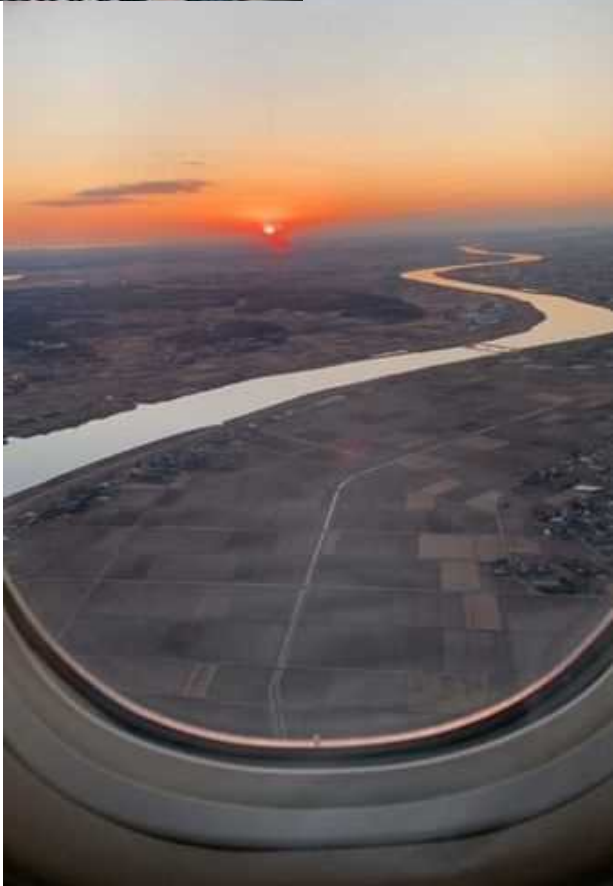
2022年1月まで2年間、大使館でシェフを勤めていた永淵麻秀です。

私が暮らしていた南スーダンは治安がよくなく、大使館員は自由に外出が出来ません。買い物や外食も自由に出来ないことから、私は日本大使館でシェフとして勤務していました。

まれに治安が良いときには、食材を求めて首都ジュバの台所、コニョコニョ市場に買い物に出かけ、ナイル川沿いで食事をすることもありました。

そのときの画像をお楽しみください。





邦人安全

今週は、大使館員の齊藤雅博さんからです。
是非お楽しみください。

(2022年4月15日投稿)

在南スーダン日本大使館の在外公館警備対策官
として、領事・警備班長を務めて参りました、
齊藤雅博と申します。4月28日に任期満了に
より帰国するに当たり、この場を借りてご挨拶
させていただきます。

私は、2020年6月16日に着任しました。
当初は同年3月中旬に着任予定でしたが、新型
コロナウイルス感染症の世界的流行により、
ジュバ国際空港が封鎖される等の影響で、予定
より3か月遅れでの着任となり、コロナ禍での
在外公館勤務スタートとなりました。

私の業務の一つである領事業務の最重要任務
は、在留邦人の保護であり、凶悪事件、抗議活
動、軍の衝突など、安全に関する多くの情報を
発信して参りました。特にジュバ市内では、殺
人、強盗等の事件が多く発生しており、外国人
が被害者となる事件も確認されております。結
果として私の在任中、在留邦人の犯罪被害は確
認されませんでした。領事業務を担当する者と
して、これが何より一番うれしいです。皆さま
一人ひとりが、お気を付けくださった結果です。
ご協力ありがとうございます。

依然として新型コロナウイルス感染症は終息
せず、在留邦人の皆さまに直接お会いできる機
会が極めて少なかったのは残念でなりません。
引き続き健康にも十分お気をつけ頂き、益々
のご活躍をお祈りしております。

最後に、在留邦人の皆さま、共に仕事をさせて
頂いた南スーダンの皆さま、大変お世話になり
ました。改めて深く御礼申し上げます。



自然と生活



今週は、大使館員の徳盛亮介さんからです。
是非お楽しみください。

(2022年4月21日投稿)

在南スーダン日本国大使館の徳盛亮介です。
事務仕事がメインのため、ほかのみなさまほど
外出や様々な経験をしているわけではないので
すが、約3年半の任期を終え、南スーダン
(ジュバ市)で生活して印象に残っていること
を3つご紹介します。

1つ目は、自然のことをご紹介します。

私は、アフリカ＝砂漠・赤土・緑が少ない・
とても暑いというイメージで南スーダンに來ま
した。

ところが飛行機で移動中、ふと窓から外を見
下ろすと広大な自然が広がっており、『あ、や
ばい、飛行機乗り違えたのか・・・？』と焦ると
ともに、キレイな自然だなあと感動したことを
覚えています。

なぜアフリカのイメージがこうなってしまっ
たのか考えてみたのですが、私が昔見たアフリ
カのニュースやテレビ番組で放送された場所っ

て、人の生活や砂漠の動物特集ばかりだったの
で、自然が少なかったんです。

けど、冷静に考えてみると、人が生活する場
所を確保するために自然が切り開かれて、土が
むきだしになっていただけなんですね。

2つ目は、ジュバの玄関口である空港につい
てご紹介します。

私は、2018年8月に前任地のデトロイト
から転勤してきました。

飛行機着陸後に飛行場内を徒歩で歩かせ、
飛行機のジェット噴射に吹き飛ばされかけ焼か
れそうになり、そしてたどり着いた先の入国審
査がテントで行われたことに驚き、『あ、自分
はアフリカに來たんだな』と初アフリカの洗礼
を受けました。

ちなみに私のときは晴れだったからかもしれ
ませんが、預入荷物は地面(土)の上に置かれ
ました。雨の場合はどうしていたんでしょうね。
もちろん、アフリカすべてがこうではありません。
たまたま私の着任した時期が、南スーダン
が独立してから数年しか経っておらず、まだ空
港の整備ができていなかっただけです。

同年の10月末にジュバ国際空港の開所式があり、その後テントでの手続きから屋内での手続きになっています。

3つ目は、生活についてご紹介します。私が着任した頃は、携帯電話を持っていたもメールの送受信ができず、通話は音質も悪く会話が難しかったです。しかし最近では、私の行動する範囲内ではLTEの電波が入るようになり、通話できなかった場所での通話が可能になっていることに気付きました。

また、いつも行っているスーパーが拡張工事されていたり、カフェスペースが追加されたり、品揃えが増えたりと、着任したての頃と比べるとだいぶ良くなってきたなあ、と感じています。（日本のお醤油の取り扱いが無くなったのはとても残念ですが・・・。）

最後に念のため注意喚起と広報をさせていただきます。

南スーダンの危険度は、外務省海外安全ホームページに記載のとおり、ジュバ市はレベル3（渡航中止勧告）、ほかの地域はレベル4（退避勧告）になっていて、現段階では気軽に遊びに行ける国ではありません（2022年4月現在）。

しかしながら、南スーダンには自然が豊かで、サファリや川下りといった観光サービスがあり、うろ覚えですが集落ツアーのようなものもあるようです。

国が安定して危険度が下がり誰でも気軽に行けるようになれば、いつか私的旅行で観光に来たいな、と思っています。この記事やほかの記事を読んで少しでも関心を持たれた方は、是非南スーダンを応援し、是非情報をフォローしてください！



部族

今週は、大使館広報・文化班からです。

(2022年4月29日投稿)

南スーダンには、60以上の部族の人たちが暮らしています。人数が一番多いディンカ族からはキール大統領が、二番目に多いヌエル族からはマシャール第一副大統領が就任しています。この他にシルク族、ムルレ族、バリ族、他多数の部族の方々が、皆それぞれの部族の言葉を話しています。そのため、異なる部族間の共通語として、彼らの間ではアラビア語や英語が話さ

れています。

多様な部族の意見や、政党の見解を反映するために、副大統領だけでも5人います。そして、国会は二院制で、下院だけで550人の議員がいます。

大使館があるジュバは、南スーダンの南部、中央エクアトリア州に位置しています。この辺りは従来、ディンカ族やヌエル族ではない、別の部族が住まう土地です。南スーダンの中の多様性。奥が深いです。



蜂蜜

皆さんこんにちは、大使の堤尚広です。本日と来週の2回にわたり、日本の読者の方に、私が南スーダン生活の中で出会った、魅力的な南スーダン産品をご紹介します。

私達大使館員は、大使館の安全規則により、自由に外出できない生活を送っています。その中で、飲食料の備蓄や自炊の材料を入手するために、毎週一回、近所のスーパーマーケットに買い出しに行きます。

ある日の買い物の際に、私は、南スーダン産の蜂蜜に出会いました。これは、純粋で濃厚な味わいの蜂蜜でした。早速、10本ほど買い込んで、日本への一時帰国の際に、親戚、友人に配りました。反応は、濃い味ですねとか、少しクセがあるねとか様々で、大好評とまでは行きま

せんでした。

実は、南スーダンの蜂蜜は、日本でも販売されています。このFacebookの2022年7月29日の投稿に、水野行生さんの投稿がありますので、ご覧ください。水野さんが販売されている蜂蜜は、高い精製技術に裏付けられて、素晴らしい蜂蜜に仕上がっています。南スーダンの自然の恵みと日本の技術の組み合わせが、新しい発展の可能性を示してくれている事例と見ることもできます。

<https://www.facebook.com/embassyofjapan.ss/posts/pfbid02Bq8Au2Jx8hnwMuhSKBhHCkpkq4Pi8YC8BSxLQivP74ZgwZpyzxEWXDhMvNpSpjh3l>

(2022年12月2日投稿)



シアバター

皆さんこんにちは、大使の堤尚広です。本日は、先週に引き続き、魅力的な南スーダン産品をご紹介します。本日はご紹介するのは、シアバター (Shea Butter) です。シアバターは、シアバターノキという常緑樹の種子の胚（芽になる部分）から取れる油脂です。常温でも簡単に溶けるので、バターと呼ぶそうです。主にスキンケアに用いられます。

写真のものは南スーダンの首都ジュバのスーパーマーケットで購入しました。レモン Grass の香りも良いです。他に、LULU LIFE という

NPO ショップでも販売しています。日本での南スーダン産の取り扱いはなかなか見当たらないようです。

シアバターを日本の親戚、友人に配ったところ、お肌がツルツルになった、よく伸びると大好評、リピート希望が寄せられています。

私自身も年齢のせいか、肌が乾燥してカサカサしやすいので、肌の保湿のため、シアバターを毎日使っています。

皆さんもどこかで南スーダン産のシアバターを見かけたら、是非お試しください。



石鹸

皆さんこんにちは、大使の堤尚広です。過去12月2日と9日の2回にわたり、「南スーダンの逸品」と称して、南スーダン産品をご紹介しました。この企画を延長し、あと2回、南スーダン産品をご紹介します。今回は、石鹸です。写真はLULU LIFEというショップで販売しているものですが、材料は何でしょうか？答えは、ラベルに書いてありますね。そう、先週ご紹介したシアバター（Shea Butter）です。あまり泡は出ませんが、肌に優しい石鹸です。長持ちします。

（2022年12月16日投稿）



アート



皆さんこんにちは、大使の堤尚広です。
JubaのMasai Marketで絵を二幅購入しました。
一つは牛の群れ（作者MCHOPA 縦横：
46x67）。牛は南スーダンの牧畜民の宝。もう
一つは整列した戦士（作者R.DUKE 縦横：
55x75）。漆黒で長身の戦士が整列している
ように見えます。この二つは全く異なる作風で
すが、絵として、いずれも印象鮮烈な素晴らしい
作品だと思います。また、南スーダンの文明、
文化を見事に表現していると思います。購入し
たお店の店員さんによると、作者は二人とも
Jubaで活動しているとのこと。南スーダ
ンの文化が日本でも知られるきっかけになれば
と願います。

（2022年12月30日投稿）



あとがき

この本の編集を担当しました、在南スーダン日本国大使館の中島真紀と申します。2022年の11月から南スーダンへ赴任し、開発協力と広報の仕事に携わっています。皆さん「南スーダン入門」いかがでしたでしょうか？

私は元々アフリカでの開発協力への関心が高かったため、自ら希望してこの地での勤務を選んだものの、赴任前は「紛争」や「自衛隊派遣」「洪水と干ばつ」「前橋市に陸上選手が来ていたな」という程度しか思い浮かぶものがなく、正直南スーダンがどのような所なのか想像できませんでした。そこで、情報収集のためネットを検索してみると、出てきたのが在南スーダン大使館のFacebookでした。初めは、街の様子や生活情報等を集めるために見ていました。しかし、徐々に投稿を遡っていくうちに、南スーダンが抱える問題や、遠い地で活躍する日本人の姿が見え、興味深く読み進めていました。冒頭ごあいさつに記載の通り、堤大使からFacebook投稿を一冊の本にまとめる案が出た時は、自分の様にアフリカや南スーダンに興味がある人にとって、この本がためになるかもしれないと思い、編集を引き受けました。

この本には、南スーダンにゆかりのある日本人が感じたありのままの南スーダンの姿が記載されています。専門的な参考書や研究論文から得られる知識とはまた違った情報が詰まっていると思います。また、投稿者の皆様には、内容に縛りや注文は付けず自由にご執筆いただきました。そのため、本としては統一感がないと感じられた読者もいらっしゃるかと思います。しかし、投稿者各々が感じ、経験したそのままと伝えられているという意味では、これもこの本の魅力ではないでしょうか。

最後に、この本は手作りです。私は編集のプロではないので、構成やデザイン面で読み辛い部分もあったかと思っています。お詫び申し上げます。それでも、読者の皆様に楽しく読んでいただけたのであれば、そして、南スーダンを応援したいという方が一人でも増えたのであれば、大変嬉しく思います。

2023年4月24日

在南スーダン日本国大使館 中島真紀